增補雅言集覽

三十

813.6
I619g
Wa8

813.6
王619g
v.2

帝国図書館蔵書

国立国会
41.3.31
図書館

691346

増補雅言集覽卷之三十

石川雅望 集
中島廣足 補

○宇の部

補 ［うね］（小大君集）「くひどころ見れバうねゐる老おそびうゑたる人のくへるゐるべー

［うゐむ］鵜繩（新六）三光俊「此川ゑさよ更ぬらーかつら人鵜繩手ゑまき船くだそゐり

補（山家）下「みるもうきむうゐむもよにぐるいろくづそのがちかさでもーたむもちあみ

補 ［うなゞける］（古事記）上卷宇那賀氣理豆至今鎮座也（万）十八、卅四たづさハりうゐがけりゐておもゑーきこともかたらひ（空穗とし陰）うゐがけりおやのゐでやーゐひ給ひー時ハ

［うながを］（空穗國ゆづり）上、四十四御車ゑ、ふたかたゑひきつゞきて立わづらふおとゞ猶かれをうなゞせとて藤壺の御車をひとつにたてさせ給へバ（大和物）四、蘆苅の段車をたてハながむるゑ供の人ハ目くれぬべーとて御車うなゞーてんといふゑーべーと

いふゝぞゝ云々（夫）卅六（惠慶法師集）「秋の野の花に心をよせつれゝ駒うゝがさぬけふにも有かな（空穗たつのむら鳥）御車ゝづかにうゝゲゝとゞめて（孝德紀）九四坊置令一人（同）十催駈賦役補（夫）四仲正「山さくらきゝひたづぬる人數ゝ身をうさきまのうながゝぞゆく（空穗祭の使）廿御車ゝつゞきてうゝゲゝいる

うなだれ（神代紀）下低佃ウナダレ（白文）二十七婆娑低覆地（源さかき）四十四あらたまるゝるゝもゝく宮のうちのどかゝ人めまれにて宮づかさどものゝたゝきばかり打うゝだれて見なゝゝやあらんくゝいたげゝおもへり（拾）雜春、贈皇后宮（情慎公集）「おはゝたゝかげにかくれぬ時ゝゝゝゝうゝだれぬべきゝでゝゝの花補（顯季卿集）「まとりすむうなでのもりのうゝざれてねをのこぞゝく人のつらさに

うなづく（源帚木）廿四中將れいのうゝづく（同）十四つゝゲぬ舟のうきたるさめゝゲゝゝあやゝゝゝさゝ侍らぬかといへゞ中將うゝづく補（著聞）十八、十五僧正のねふりてうゝづく

そ（源手習）四十四、大尼君ゞゝ〳〵〳〵ううちうゝづく

うゝづき（源玉葛）十二そいさり〳〵とうゝづきてゝいとゝふときこゝとゝど聞え給ふ（竹取）五翁答ふさだかゝ作らせたるものゝと聞つれゞゝのへさん事いとやゝゝとうゝづきをり（源みのり）十云々と聞え給へゞ打

うゝづきて（枕）二七。說經の所めづらゝがりて近くゝるより物語ゝうゝづきをかゝきゝとゝと語りいでゝ扇ひろうひろげて日ゝあてゝ笑ひ補（源うき舟）四十一げにとおもひてうゝづきてゝるゝるいとらうたげなり（著聞）六、廿四病者うゝづきゝり云々悅たるゝゝきゝてうなづきゝり云々打うゝづきゝゝて左右へ身をゆるかゝゝ心とゝゝるゝまあらゝゝゝり（同）十、十八女うなづきてあふゝゝき事ゝゝを侍るゝゝれ（宇治拾）一治部卿うちうゝづきてゝりけりゝゝゝものゝゝいひそ

うゝゐゐ（空穗藤原の君）四うなゐゝゝづかへゝどかゝち心ある中ゝまゝりゝるをえちびゝふらゝせ給ふ（大和物）二そこゝりゝるうゝゐゐゞ右京のかみよびいでゝゝかゝらひてゝゝゝよゝて云々。注ウナヰハ若き官女也（同）かつらのゝゝゝ式部卿の宮すみ給ふける時其宮ゝゝふらひゝるうゝゐゐん此男宮をいとめでゝゝとおもひかけたりけるをもえゝり給ゝざりゝり螢のとびありきけるをかれとらへてと此わらはにの給ゝせけれゞ（土佐日記）よんべのうゝゐゐもがな補（空穗藤原の君）こゞちいとおゞくうなゐゐなどゝふらふ

うゝゐゐばゝり（万）十六、十七「橘のてらの長屋ゝ我ゐゐねゝうゝゐゐばゝりい髮あゞつらんゝ補（万）九、五卅八とせ兒の片生の時ゐ小放ゝ髮ゝぐまでゝ〇此をもゝりゐうゝゐゐも

ゐりの事也

うゐるまつ（源まやろし）六 かの御かたゝの筋をぞ哀とおぼしたる中將也こゝろばせかたちおとゝもめやすくうゐる松はおゝえたるねもひ只ならまゝよりいらうゝゝとおもゐやせ（花鳥）文選ニ馬鬣松ト書テウナ井松トハヨミ侍リ云々タトヘバ墓ノ松ヲナキ人ノカタミト見ルガ如ク云々

うゐるこ 髫髮（拾）夏躬恒「郭公をちこのへりゐけうゐるこゞ打たれ髮の五月雨のそら（續紀）四三人祖乃意能賀弱兒乎養治流事乃如久 補（堀次）「うゐる子ゞもおちのゝみをとりたてゝまきそめ川よ淵瀬ゝいるな

うゐや（八雲御抄）うゐやゝ人をこむる所をいふ（神后紀）十四納櫨中以火焚而殺

うなで（夫）五師光「まそらをがうゐでの道よいぐゝさて水口まつるときいきよれり（崇神紀）十二開池溝以寛民業○畝手之謂

うゐゝ（和名）三三項和名奈之頸後也。今えりといふゝ衣のえりのあたる所なれゞゐるべゝ（宇治拾）十二。虎ヲ射タおとゞひのゝさよりうなゞに七八寸をかりとがり矢を射出ゝつ

うら（後）懸二（伊勢集）「わたつみとゝのめゝ事もあせぬれゞ我ぞわが身のうらいうらむる（同）懸二ちかぬ「流れていゆく方もゐゝゐそぎ川わゞそのうらやかぎりゐるらん（伊勢物）（古）懸三小野小町「見るめおき我身をうらとゝらねどやゝれなでゐまの足たゆくゝる。顯注我身をうゝとそへさる也。文丸按ようらゝ末の心よてわが身のもふれ方よなるをいふゝ（後）懸五よみ人しらず「さゝゝら波まなく立めるうらそこそよゝあさゝともみつゝわをれめ（古）懸五よみ人しらず「うきめのみおもひながるゝ浦ゐれゞかりよのそこそあまいよるらめ 補 遠鏡に云詞ヲ下上ニ打カヘシテ心得ベキ格也我身ヲミルメナキ浦トハシラヲバヤトイフ也ミルメナキ浦トハ逢ガタキト云意也浦ハタダミルメニヨレル詞ノミ也サレバ我身ヲ恨ムトモウシトモイヒカケタルニハアラズサテ後ニ我身ノウラトヨメル哥多キハ此哥ノ詞ニヨレルモノ也（新勅）懸一よみ人しらず「朝なゝゝ蜑の掉さすうら深み及もぬ戀ゐ我いそるかゐ

うら 裏（拾）賀（伊せ集）鏡いさせ侍りゐるうらは鶴のかゝをいつけさせ侍りて（拾）懸五よみ人しらず「君まふる涙のかゝる袖のうらいいもゐゐりとも朽ぞゝぬべき（源常夏）廿五まづ御文奉れ給ふ云々うらはいまゝとやゝ暮はもまゐりまんと思ひ給へゝつゐいとふはもゆるはや

うら 占（拾）懸三（人九）（万）「ゆふにとふうらはもよくありてよひざはまさらん君告る（万）きまるゐ（万）

をいつか待べき（とか待ん（万））補（万）廿一長歌　玉ゐ土の道ゑ出たち夕うらをわがとひしかばゐふ
うらのわれゑのらん（顯季卿集）「あひ〳〵てつげのをぐしのうらをしてつれな
く人をゐたのむ哉

○補　うらへ（万）十四七「むさしぬゑうらへゝたやきまさてにものらぬ君が名うら
ゑ出ゑけり（同）十六長哥云々ト部すゑ龜もおやきそ云々八十のちまたゑゆふれゑ
もうらゑもぞとふ（同）十五廿五「めきのあまのゐつてのうらへそゝさやきて

○うらなひ（源浮ふね）廿九いとおそろしくうらなひたる物いそゑより京の内をさへ
さりてつゝしむなり

○うらなひまうを（榮）四廿三一日おらぎさまゞ〳〵うらなひ申をを（源柏木）五陰陽師
などもおゐくゝ女の靈とのみうらなひ申ゐれば

○うらまさ（新六）五行家「あふあとをとふやゆふゐのうらまさまつゞのをぐしのを
るしみせなん

うらいさ（大かゝみ）二さくをぞもうら板どもをいとうるゝしくかなかきてまかり
出つゝ又のあしさゑ參りて見るゑゐのふのうら板ゑ物のをゝゐてみゆる所あれば
（同）五寢殿裏板のかべのすあしくろのりゐれば

補　うらむのかせ（後忠集）「わがあひいくぞのうらむの風ゐれやなびきもあへぞ吹
のへしつる

うらゐん（名義集）四八孟蘭盆西域之語轉此翻倒懸盆是此方貯食之器三藏云盆羅百
味或貢三尊仰大衆之恩光救倒懸之窘急義當救倒懸器

うらとけ（重之集）三「山吹の八重さく花をむつましくとへやひとへのうらどけに
ゐり（後）春下、讀人しらず「春日さを藤のうらとのうらとゐてきみしおもむゞゐれもたの
まん

補　うらとふたし（橋占問）（夫）廿一家長「おもひかねうらとふたしよまさしかれよの人で
とをたのこわさらん（同）後九條内大臣「おぐさめてうらとふたしよまさしられつれなき
中をまちもわさらん。橋うらの事との部に出

補　うらぢ（小侍從集）「なまたゐの浦ぢの月の影をみて蘆のゐぞゑゑ秋ゐせぞふく
（千載）旅家隆「たびねをるをまのうらぢのさよちどり聲こそ袖の浪いのゐゝれ（新
後拾）雜上國冬「浦ぢよりうつこえくれば山とねまでおかゞ松風ぞふく（新千）
冬爲子「さよふけてのゝ八千島の聲をなりかがをむとちのうらぢなるらん（隆信集）
「戀をのこをまのうら、おとろへて浪まゝとふといかでしらせん（壇鎖）「あか

しがた浦ぢもれ行あさ　よきりまぎ入あまのつりふね（拾愚）上「さゞなみや
しげのうらぢの朝霧ゝまはまもえぬ沖のとも舟

うらわ（新古）覊旅家隆「のべの露うらわい波をかこちてもゆくへもしらぬ袖の月かげ
（千載）秋上崇徳院「玉よそるうらわの風ゝ空もれて光をのこす秋のよの月

うらわかし（蜻蛉日記）四八月近きあゝちをる1見る人ゝ猶いとうらわゝくいかゝ
らんとおもふ事しげきゝまぎれてわゞ思ふ事今ゝさえてゝけり（伊勢物）四十九段うら
らわかみねよげゝをゆるわか草を人のむをさんことをしぞ思ふ（蜻蛉日記）二さし
むれゝる谷の方よりいとうらわゝき聲ゝ云々（万）八、四十八「高まとの秋野のうへの
かでしこの花うらわかを人のかざしゝかでしおの花（同）十四「をさとある花橘を引
よぢてをらんとそれどうらわかをこそ。（勢語臆断）末ノ字ニアラズ万葉ヲヒキテ
只若キ也ト

補 うらわゝり（堀百）「つかでひくなゞの小舟や入ぬらんかゝよむものゝさづのうらわゝ
りをる（月詣）十長具「まてしをしうらわたりをる友ちどりわれもたつべき磯のゝびゝ
ねぞ

うらかれ（拾）戀三人丸（万）十（人丸）「わがせこをわが戀をれバわゞやどの草さへ野ゝ
へうらゞれゝけり 補（新古）秋下寂蓮「人め見しし野べのけしきゝうらがれて露のゝをが
ゝやどる月かゝ（同）同俊成女「色かゝる露をバ袖ゝおきまゝよひうらがれて行野べの秋
かゝ

うらゝなし（源あかし）廿二旅衣うらかゝしきゝ○契云うらのかしうらゝさびしなドイ
フうらハ皆心ナリ万葉ニ心モトナシトイフヲウラモトナシトヨメルニテ知ルベシ
身ハ外ニアラハレテ見ユレハ表也心ハ内ニ有テカクルレバ裏也（万）十五、卅四「春の日
のうらかかしきゝおくれゐて君ゝこひつゝうつしけめやも（源玉かつら）五舟子と
もの云々うらかかしくも遠くきゝけるこのかとうゝふをきくかゝゝゝ云々「舟人も誰
そこふとうおゝ島のうらかかしゝゝゝゝ聲のきこゆる（拾）九（六）長哥云々壚がまのう
らかかしゝゝゝゝゝもゝく世をしも思ひかをその湯の云々 補（万）二、二十「あさ日てる島
の御門ゝおゝゝしく人音もせねがまうらかなしも（同）十九、十八「うらかかしゝ春のすくれ
バ（同）十九、四十八「春の野ゝかをゝゝゝゝきうらかかしこのゆふのゝゝゝ鶯かくも（同）
十九、十八やつをゝゝ霞たなびきゝゝゝゝゝゝゝつをき花さきうらかかし春のをぐれバそと
とぎをいやしきかきぬ

補 うらたつかゝ（壬二）「霞ゆくゝゝつさへつらし大淀の浦たつ波ゝをへるかり

がね

うらづさひ（源わかな）四　うらづたひのものさわがしかりしをど

うらなき　く（源帚木）廿六例　のうらなき物から（同わかな）下紫詞　いと打とけまくゝ

心もづゝしき有さまゝるきをいとさゝしべきうらなさをいろまに見給ふらんとつ

つまゝれど○中世ニテハ裏ナクノ心ニテイヘリ契説ハ万葉ノ頃ヲイヘルナリ心

ノウラオモテナクトイフ心ナリ（枕）十二一　打とくまゞき物あしく人まいたるゝ人さ

るゝよゝとしられさるよりゝうらなくぞそめる（小大君）十五（新續古）「君ゝかく忘

れゞひこそひろひれうらなき物ゝわがこゝろかな（後）十三元輔詞　ひたゝれあひまつ

ゝたゝるまうらなんなき（恵見集）それゝきゝとやいろゞといひされば「住吉の

きゝとゝもいゝゞおきつ波猶打かけまようらゝなくとも（源わかな）下九十三　うらなからん

ためゝひきゝへゝあれに（同）同百二　うらゝもをてゝはるとの給ふけゝきのうら

なきやうなる物からいとゞはづゝしきまの顔の色さゞふらんと覺えて（同こてふ）十八

物の心えつべくゝ物ゝ給ふめるをうらなくゝもうちとけたのみ聞え給ふらんあそ

心くるゝれ（源朝かほ）十一　ゝへりける世をうらなくてをぐゝけるよとおもひつゞ

けてゆるゝ給へり（著聞）十六廿六　申まつけて其はゞかりあれどもうらなく申さばよも

心おき給ゝゞとて申いづるぞそのつくゝの女われまあもせたまへ（後拾）戀四堀川右大臣

「うゝとてもさらまおもひぞゝへされぬ戀ゝうらなきものまぞ有はる（源わかな）

上廿三　今ゝさりともとのゝ我身を思ひあがりうらなくて過ゝはる事の人わらへなら

んことをゝたにゝ思ひつゞけ給へど（同夕きり）七十一　とゝ頃今ゝとうらなきさまま

うちたゆゝことけ給へるさまをおもひ出るも（新拾）釋教源信　「夏衣ひとへまに西をおもふ

かなうらなくみだをたのむ身なれば補（伊勢物）（新千）戀一　「むつ草のなぞめづらゝ

きことのむぞうらなくものをおもひけるかな○正明云うらなくゝ今の世まきのな

いといふ程の事也廣足云此説少かなむぞ（新千）戀三相摸　「さよでろものさねてかへる

君なればうらなくきさるうれゝけもなゝ（月詣）九親盛　「くれて行秋の心ゝつられは

どうらなくまねく花をゝきのな（新後撰）釋教行尊　「衣手につゝみゝ玉のあらはれてう

らなく人まみゆるけふかな

補　うらなぎ（万代）雜三兼盛　「うらなぎまつりのをたれてくるまれぞいたくなたちそ

沖つゝらなゝ

うらなゝ　裏無（禁秘抄）下七ノ所ニ　主殿司今不取侍臣脱沓裏無（五代帝王物語）三條の相國

禪門ゝ極てゝれさる人、中べき事ありて今出川の第へわまりたりはるまま乘なゞ

らやり入させて中門の戸　平よせてづゝから裏無を取出て堂上ゑたきて公卿座に居て對面ゝて歸りゑたり〳〵（諸度歌合）ゑもうらなゝといふあり草履の事ゑや（建武年中行事）六月十一日　次ゑうらなゝを下ゑ置てめゝてたつゑゑ向ひてみあゝあゆませ給ふ（江次第）七ノ廿三解齋事ノ條　置藺履一足無裏歟　近代以藁尻切置之（盛衰）三ノ廿七濱のまさでにうらなゝをぬぎ置たる所へ二三度をかり往還りたる跡あり○後世緒太といふもの也と新野問答ゑゑたり蒲葵を用てつくる也とぞ觀應二年四月四日園大暦ゑゑゆ今藺を編て作といへり

うらゝ（源てゝふ）四「春の日のうらゝゑさゝてゆく舟ゝさをのゝづくも花とちりけり（堀太）殘雪基俊「春の日のうらゝにてらゆ垣根ゑゝ友まつ雪ぞきえがてゑそる補（榮ゆふして）よのそどゑゑもりぬる空のゆゝきゆいとたれ〳〵くあゝろのどかにてうらゝゆかゝ夕ゆり

うらゝら（源とつ音）初とゝたちかへるあゝさの空のゆゝきゆでりゆくくゆらぬうらゝかけさゑゝ（同てゝふ）八鶯のうらゝゝゆるゆゝゑ鳥のゆく花やかゑ聞わたされて（濵松）四、四十一大方ゆかりゝへだてゆうらゝかゑ打とけ給へれど（山家）下「ことゝへゆゝてもゆれゝとるけゝきかゆうらゝゝゆなれや人の心の（つれ〳〵）三百卅四まゑと

ゑゝらぬ人ゆゆどかゆからんうらゝゝのゑいひきのせゑらんゝおとゆゝく聞えゆゆゝ（源すさ）四十四そらのゆゝきゆらゝかゆるゑ補（枕）一ノ十五正月一日三月三日ゝいとうらゝかゆる（同）十ノ廿一二月朔日のゆどゑ云々つとめて日のうらゝゆゝゑさゝ出たるゆどゑ（同）十一ノ三日ゝいとうらゝかゆれどそらゝあさゝどりゑゆゆゆゝみわたるに（同）十二ノ一日のうらゝかなるに海のおゆてのいみゆうのどかゑあさゝどりのうちたるを引ゆたゝたるやうゑゝえて

うらむ恨（源末つむ）八哥云々とうらむることゆたければ

補うらむらさき（拾愚）上「ゆく春をうらむらさきの藤のえゆかへるたよりゑそめやをつらん

うらうへ表裏（源末つむ）卅ふるめきたるひたゝれのうらうへひとゝうとまやかる（枕）七ノ廿五いといみゆうきよげゑうらうへゑ事おほくかき給へる（和名）十二衣服部表裏說文云表衣外也宇閉表衣内也宇良（宇治拾）一ノ四うらうへにふとゆらびゑゆゆゝたる鬼ゆをゝらゆ（賴政集）上「露ゝのぐ山ちのきくゝうらうへのむかまゑさへそうつろひゑゆる（夫）十一五聖「秋のゝのゝさゝゝゑされる萩ゝれゝうらうへもゆくにゝきなりけり補（相摸集）人ゆうしゝわゲ身ゆつらゝとおゆふにゝうひうへにゆそ

袖いぬれけき（宇治拾）　かたく〳〵のかゝにおぢつれさりければうらうへまはぶつきさるおきかゝはおそかりさりけれ（隆信集）「うらうへによわりのみ行われをおきてこひまゝぬ身といかゞきられん（同）「とゝるゝもとふまつれてもうらうへまゝ涙のゝおそせきもやられぬ

うら〳〵（枕）二、四　二月十日の日のうら〳〵と長閑まてりわさるまゝ（同）一、二　やよひ三日うら〳〵と長閑まてりたる（同）七、八　春いそらのけしきのぞりにてうら〳〵とあるまゝ（源すき）四十八　海のおもていうら〳〵とおぎわさりて（土佐日記）廿九日舟出してゆくうら〳〵とてりてあぎゆく（堀次）春日仲實　「百千鳥さへづる春いうら〳〵とおれどもわゞ身くもりつゝのみ補（万）十九、四　十八　宇良宇良爾てれる春日まひぞりあがりこゝろなしもひとりし思へば（枕）一、一　空のけしきうら〳〵とめづらしくゝもをみとめさるまゝ（同）一、五　三月三日うら〳〵とのぞかにてりさる（同）四ノ十四　御前の梅いうら〳〵と日のけしきのどかまて人まゝ見せまゝ（同）十一、十四　日のうら〳〵とあるひるつかさ

補　うらくわし（万）十七、卅七　うらくわしふせの水うみまあまふねままりぢりいぬき雁がね（同紅葉賀）ゑゝその内より入り給ふぞうらやまし〳〵（同すき）廿二　よる波のゝつかへるをゝ給ひてうら山〳〵もと打ぎし給へる（伊勢物）七段　「いとゞし〳〵く過ゆくかたの戀しきまうら山〳〵くもかへる波かな

うらやみ（源手習）廿三　山でもりの御うらやゝい中〳〵今やうたちさる御ものまねびまゝん（同みをつくし）六　源氏のおとゞいうらやみ給ふ補（詞花）春、赤染衛門　「よろづ代のためしまゝ君ゞひかるれば子日の松もうらやゝやせん

うらやみなく。俗ニウラミコヒナシトイフニ同（源やとり木）八　それたまゝのおとゞのいとゝめたちなゞらこゝかたかなたうらやゝおくもてなして物し給いぎやいある（同）八十五　それもゝが有さまのやうにうらやゝおく身をうらむべかりゝるゝし（同紅葉賀）廿八　云々といひかいして羨みおきしぞけなき姿に引なされて皆出給ひぬ補（同玉葛）四十三　かたくまうらやゝなくこそものもべかりけれ

うらやみあり（枕）五、四　帳臺の夜行事の藏人いときびしうもてなしてかいつくろひ二人わらいより外い入るまゝとおさへておもまくきまでいへば殿上人など猶是ひとりむかりいなどの給ふ藏人詞　うらやゝありいらぞなどかたく〳〵いふまゝ

補　うらまゝ　浦廻（万）十五、十二　宇良末欲理おきてわされば（同）同十一　宇良末こぐかも（同）九、卅二　「玉津島磯のうらまのまなでにもまゝひてゆかな妹にふれけん

補 うらまつ（万）廿、十四「秋風に今ゝ〳〵とひもときてうらまちをるゝ月かたふきぬ御馬

うらぶれ（万）五、廿五「獨ねのうらぶれをるにさつた山をまちゝづかがわをらえをんゝ（同）七、十一「秋やまのもみぢあもれそうらぶれていりまーいもゝまてどきまさぬ（同）十、卅九「君まこひうらぶれをれば秋萩ーぬぎさをーかなくも（同）同同「鴈きさり萩ゝちりぬとさをーかのなくをるあをうらぶれにけり猶多（堀初）鹿顕

季「よもをがら雫の山にうらぶれてつまとひわぶるさをーかの聲（万代）戀三下野「うらぶれてゆきあふ道のかたゝ舟さてもかひあき名こそつらけれ補野洲良云うらぶれいこびてといふに同ド詞也心の物まふれておもひ不堪をいふ詞也ウラの約ノワとおりブレの約轉ビとおれいうらぶれわび同言おるそーるべー（万）十一「うらぶれて物なおもひそ天雲のさゆたふ心こがおもをおくま（玉葉）秋上基俊「さをーゝの今朝うらぶれておくなへま野原の小萩花散ぬべー（新續古）雜上孝廣「くぎのをを吹夕風にうらぶれて田子の入野まうづらなくおり補（万）十三君戀浦經居（同）十二浦觸而かれまー袖を

○うらぶるゝ（六帖）五「れなド名をたちとたちなばから衣きてこそおれめうらぶるゝまで

○うらびれ（古）秋上人よみしらす「秋萩まうらぶれをれば足引の山下とよみ鹿のなくらん

○今ノ本ニウラビレト有ハ誤ナリ　○万葉ニ裏觸ト借字ニカケレバウラビレハ誤也楚辞ニ怳々ヲウラブルト點セリ万葉ニアマタアリ愁ハシク物思フサマ也眞淵云ウブルト同シ

補 うらこー（拾）冬よみ人しらす「神無月時雨ーぬらー葛のそのうらまかるねに鹿もかくなり

うらめづらーき（古）秋上、よみ人しらす「わゞせこゞ衣のそをを吹ゝへーうらめづらーき秋のもつ風○契云ウラカナシ、ウラサビシナドイフ類ナリウラハ心也毛詩云不屬于毛不離于裏云々

うらこひ（六）二（古）秋こぎわうらぶれ（古）「いもまわゞうらこひをれば足引の山下とよを鹿ぞかくをる（万）十七、廿九君まつとうらこひをりこゝろくー補（万）十七、四十四「うらまひーわがせのきこいかでーまゞ花まもがもなあさなーくーこん（同）十七、卅九打かびく心もーぬまそこをーもうらこひーみとおもふどち

補 うらさび（万）一、卅二「うらさぶるこゝろさまねー久方の天のーぐれのながらふみれば（新續古）雜上實密「秋風の松ふくおともうらさびて神もこゝろやそをの江の月（後拾）哀傷伊勢大輔「おもひやるあもれおまものうらさびてあーのうきねわさぞかかれ

けん(万)二、十七「さゝなみのくまつるかゝのうらさびてあれさる京それかなしも
(新古)旅、入道前關白太政大臣「日をへつゝゝやこゝのぶのうらさびて波より外のおとづれもなし」

うらさびし(古)哀傷貫之「君まさでなふりたるよはの鹽がまのうらさびしくもゝえわたるかな

うらめし(源夕かほ)十一大殿にいさえまおきつゝうらめしくのゝおもひきこえ給へり(同桐つぼ)十八「かおいざりけるいのちのそぞつきせぞうらめしき」云々

四おのゞゞゝうらめしき折〳〵云々

補 うらゝゝ(万)四、十六いなゝづま浦箕乎過而

うらゝゝ(源桐つぼ)五もとよりさふらひ給ふ更衣のざうしを外ようつさせ給ひてうへつぼねは給たにそのうらゝましてやらんゝさおし(同同)二人の心をうでこのしうらゝをおふつもりはやありたん(同帚木)四十二いとつらきとうらみられて補(伊勢物)人の恨ゝおふものはやあらん

うらゝゝぞあろ(後)戀二、よみ人しらす「これゝかくうらみ所もおきものそうしろめたくゝおもゝざらおん(源こそふ)廿四うらゝ所あるこゝちしたまふ

補 うらみこのね(千載)戀三院御製「けさとともぬつらさまものゝおもひしれされもさこそゝうらゝこのねしゝ

うらゝゝくる(源紅葉賀)卅女ゝ猶いとえんゝうらみこのくるを(同みゆき)廿八御まへのつらくおもしまにおりとうらゝこのくれゞゞ

うらゝよる(源やとり木)七まめやかはうらゝよらゞ

うらみつゞけ(源藤さかま)十六いとおそくうらゝつゞけて

うらゝのゝしる(宇治拾)二、五ゝゝる事し出給へるとおきぬさりうらみのゝしる事ゝぎりおし

うらゝのおそ(源うす雲)廿二何事ならんこの世はうらゝのこるべく思ふことやあらん(同夕ゝゝ)五此世はそおしうらゝのこるゝわろきわざとなんきく(同わかな)上、四

この世はうらゝのこる事も侍らに

うらみでと(源まき柱)卅八ましてなぞ此おとゞの折〳〵思ひもおたぞうらゝでとゝし給ふと云々

補 うらしを(万代)雜三素俊「夕されゞむおのうらしをみちぬらし入江のそとり聲さわくなり(万)十五、廿八「秋山のもゝちそゝしわがをれゞうらしをちくいまざあゝな

くま

うらーま（實方集）「あくまでもみるべきものを玉くしげうらーまの子やいつまも思いん（同）「玉くしげあまいにーへのうらーままるされあらひつゝおそくあくらん 補（新千）懸三爲明「うひなーや浦島ゞ子の玉くしげやゞて明行よもの契ゝ

補 うらーまのもま（山家）下「いひそてゝのちの行へを思ひもてゞさてさいかまうらーまのもま

うらめぐり（夫）十七仲正「引つれていづ方へとゝむらちどりうらめぐりして友さそふらん

うらもおく。奥底モナキ也（源空蟬）九、軒ハ人のおもひ侍らん事のみむづゝーきまなんえ聞えさにまドきとうらもおくいふ（万）十二、十四「つるぞこのひとへ衣のうらもおくあらんまゆゑに戀わたるゝも（空穗樓の上）下ノ十四「打とけてうらもなくこそさのこけれ思ひの外まこさる下ひも（源夕顔）九うらもおく待聞えゞほゝるこのたつこのたの人そ（同わかな）上、四十五そまーぬれさる御ひとへの袖をひきかくーてうらもおくなつかーき物このら（蜻蛉日記）一長歌云々ゝら衣うちきて人のうらもなくなれー心を思ひてい云々（同）「うらもおくふこやるあとをわたつこの汐のひるまも何まゝいせん

補（万）十三、長歌卅二いさなとり海の濱べにうらもおくやゞれる人い（同）同卅三うらもなくこやせるきこい（同）同三十「うらもおくいまー君ゆゑあさなさおもとなぞこふるあふといおーに

うむ 續、倦（万代）五哀傷（新拾）十後朱雀院かくれさせ給て後白川殿まかきおもらせ給ひて云々、上東門院「けふとてもいそゞれぬゝかおべてよを思ひうをにーたおばたのいと（拾）雜秋、よみ人しらす（貫之集）「世をうみてわゞゝすいとい七夕の涙の玉のそとやなるらん（六帖）「さてぬきまの身をばうむともあさいたのおりてい君まあいゞとぞおもふ 補（散木）「心ーてあのみもをらんゆふされゞよをうをがきにあらーふくおり（著聞）十二、うみ柿の落ゝるゞ（金葉）雜、云々子をうみてけるゞもとよりうをさるうめをおこせさりゝれゞよめるよみ人しらす「葉がくれにつもるとみえーゝぞもなくこいうみうめまの成まけるこのお

補 うむ 運（千載）雜上運をいづる百首歌ゝ侍ゝる中まよめる

補 うむる（山家）下「寺つくるこの我谷につちうめよ君ぞりおそ山もくづさめ

うんこのん 雲繝。うけんノ所ニモ（盛衰）七、十五

補 うむかー（續紀宣命）宇武何志伎、宇牟賀斯美 宇牟我自彌（詔詞解）二、廿八

うん〳〵（云々）（宇治拾）二、四　かぞへんとてこれば、ちひさき文字にて金御嶽云々とこと
でとくかゝれたり

うむど。久老云、倦シ也（枕）四、六、頭中將清ノルスヘ來ルねおびれておき出たり〜けーきい
らへのもーたなさおぞかたりて笑ひ給ふ（カタル所）ヲ跡ニテカタ夕ようこそ思ひうむどにーゐなとさるも
のをばおきたるなぞ云々（源夕きり）五十四　さやうの事の思むぞおるようつけてうんど
給へなどいもれ給もん事をおやもおり（竹取）御子さち上達部きゝておいらゐようあ
たりよりだようなありきそとやゝの給ゝぬといひてうんどて皆歸りぬ（源あふひ）十
いゐようおやーうんどようけむといとやーくて（伊せ物）百二段　あてある女のあまよ成て
世中をおもひうんどて京よもあらぞもるゐある山ざとよ住けり（空穗國ゆつり）中ノ
十六　あやーう年頃山里にこもり物ー給ふらんゝ世中ようんど給ふ事やあらん（空穗
嵯峨院）十九　かくて後ゝおもやーうんどておやもらゐよも聞え給ゝぞよるひるおや
ーなげきておき給ひつゝ（大和物）二世中をうんどてつくーへ下りける人女のもと
まおこせたりける補（源まき柱）十七　ふもべられけるやどあらむよ人もうむど給ぬべ
ければ（空穗國ゆつり）中十、それまおもひうむどておもりさるとおんうけ給ゝりー
うんーもて（蜻蛉日記）三　まーてゝぐるーき事おやかりつると思ふ心ちだようよう

んどもてられぬると覺えける

うゝ　植　うゑ（伊せ物）廿一段「わもれ草うゝとぞよきく物おらばおもひれりといおり
もおなまー（源帚木）卅五　前栽おぞ心とぐめてうゑたり補（万）十五、卅三「ひとの宇々流田
ゝ宇惠まさぞいまさらにくゐゐられーてあれゝいかにせむ（万代）秋下、伊勢大輔「永きよ
のためーにうゝる菊の花行末とほく君のゝぞ見む

うゐのよ　有爲の世（堀次）平兼昌「有爲の世ゝれふのあすこのの鐘の音を哀いつまできりん
とぞらん（万代）雜五善珠「有爲の世ゝいづら常おるくさの葉にむもべる露の風まつが
でと

うのもおくたー（堀太）基俊（千載）夏「いとゞーくーづのいやりのいふせきに卵花（堀太）
くたーさみだれぞふる（万）十、十三「春さればうの花くさー吾こえー妹がかきまゝあ
れまけるりも（同）十九、廿九「卵花をくたすおがめのゝづもおによるこづゝおもよらん
こもかも

補　うのもおやま　卵花山（万）十、廿二「かくもかり雨のふらくにやとゝぎもうのもな山に
おほりおくらん（風雅）夏　經房「朝まざき卵花山をゝわるせば空ゝくもらでつもるー
らゆき（新千）夏、法親王守覺「やとゝぎす卵花山ようやもらひて空にーられぬ月よおくおり

（小侍從集）「降つもるゆきと分あしあとよりゐ卯花山の道をたどれり（新千）夏、宗尊親王

「明ぬともおぼえ影のこせ白さへの卯花山のみどりよの月

補 うのけ（拾愚）上「露をまつうのけのいかよーとるらん月のひつらのかげをさのこて

うく（源とこ夏）五夕つけゆく風いとをゞーくてかへりうくわらき人々ゐ思ひさり（同竹川）四十此中將ゐおぼえ思ひそめてー心さえぎうくもつらくも思ひつゝ

うくる 浮（榮衣の珠）十「おきふーの契りもたえてつきせねば枕をうくるなみざなりゐり

補 うぐひ 鵜川、神祇伯顯仲朝臣の哥ニ「かゞり火の光にまぐふ玉もよいうぐひのいをもかくれさりけり（玉かつま）今ゐ一ッの魚の名なれどもゐとゐ鵜のくひさる魚をいへるなるべー

うやゝー 恭（續紀）廿四七、宇也宇也自久 補（詔詞解）四廿二、恭、宇夜宇夜自久

補 うやまふ（夫）卅六殿上ニて戀の心をよみ人しらす「みさでざようやまふいそとうちさらーもらふるーはをおでめかねつるつる

うま 馬。双六ノ（枕）七、七、つれ〳〵なる物、馬おりぬ双六思フ目ノ出ヌ也（禮記）投壺晉書袁彥道投馬絶叫ス

補 うま 馬（基俊家集）そちのくれ守のもとよりれ朝臣馬えさせんといひて任やゝもてがたはなりぬれどおとせざりーらば「あらさまのとーれいつとせまちさびぬわがよもーらぞうまゐたのまゞ

補 うまい（万）十三、卅、長歌云々人のぬる味寢ゐねぞに（同）十三、十四「白たへのさもとゆさけく人のぬる味宿ゐねぞやこひわたりおむ

うまば 馬場（榮駒くらへ）一東のさいをやゞてうまばのおとゞよせさせ給ひて（源わかひ）十二馬場のおとゞのゐとりたちわづらひて

うまはまどりさるうー（空穗國ゆつり）上、廿八一われゐ馬はまどりさらん牛はやうはて何事をらゐ

うまれ 生レ（源桐つぼ）三玉のをのこゝさへうまれ給ひぬ（同夕顏）四こゝの品の上はもさもりなくうまれ給ひめ

うまぞへ 馬副（枕）十一、七、馬ぞへのほどはおぼえいへば

うまそひ（源わかな）下ノ十五馬そひ隨身ことねりわらゐ（枕）七、二馬そひのゐそうーたてさるをかりーて（宇治拾）十三、五冠せさぜとて馬ぞひのいゐゞ（源みをつくし）廿三馬ぞ

ひわらいのそど皆作り合せてやうかへてさうぞきわけさり

補 うまねぶり（著聞）十六二 もやうまねぶりをしてさづおうちをて丶

補 うまかへ（万）八一 馬數而朝ふますらむ（同）廿二 馬副而御獵た丶し丶

うまのもなむけ（土佐日記）舟路なれどうかのもなむけを（同）昔あべの仲丸といひける人い云々かの國人うまのもなむけしけるを云々（同）離別 人の馬のもなむけをしてよめる 貫之

かの國の人うまのもなむけしけるを云々（同）離別 人の馬のもなむけをしてよめる 貫之

（伊せ物）四十八段 馬のもなむけせんとて人をまちけるを 補（大和物）二人のくにのかをにてイ

のくざりなるうまのもなむけをつゝをの中納言してまち給うれるに（古）雜下紀

のとしさたゞあたのそけをまゐりける時を馬のもなむけせんとてけふといひおく

れりける時を（伊せ物）百十五段 うまのもなむけをたをせんとておきのゐみやこゞまと

いふ所をしてさけのませてよめる（後拾）別つくしへ下りける人に馬のもなむけし侍

とて云々

補 うまのつめ 馬の爪（万）十八廿二 うまのつめいつくにきもみ

うまのくち 馬の口（伊せ物）六十三段 狩しありきけるをいきあひて道をして馬の口をとりて

のうゝくゝなん思ふといひければ（枕）九ノ水飯くもけとてさゞきのもとを馬引よせ

るを覺えある人の子どもなどゝ雜色などおりて馬の口馬の口とるなどしてをゝし

（源すま）十八。藏人也 おりて御馬の口をとる（同うき舟）十六 此五位二人なん御馬の口を

いさふらひける

うまや 驛（新勅）雜四 伊勢の勅使をして伊賀のうまやをつき侍りける 後京極（蜻蛉日

記）一「なづくべき人もなをてゞそちのくのうまや限りをあらんとそらん

うまやゝ（大和物）二「しのづゝのうまやゝとまちをびし君いむなしくなりぞ

しをける（六帖）二、うまや「そちのくのうまやゝとかぞへつゝあふそのちゝくな

るゞうれしさ 補（同）「東路のさとのとゞくもあらなくにうまやゝときみをまつ

かな

補 うまぶね（空穗 初秋）上九 おまへにうまぶねたてゝ御うまどもをまくさゝれ 云々

このましの馬ぶねの馬十疋かゝら（大和物）五塵をりのものものこさぞそなもて

いぬ唯のこりたる物い馬ぶねのそなんありける

うまご 孫（日本靈異記）まそゆ（和名抄）にい無萬古とせり（源末つむ）廿七 娘をやうま

でにやもしたなる大きさの女の云々（同玉かつら）七 故少貳のうまでいかたいなん

あなる

うまであつこのひ（源わかあ）下ノ廿二夏の御方ハかくとりくゝある御うまであつらひを
らやとて
うまざくり（夫）廿一信實「數ならぬまゝ一ら一られたる馬ざくりさのゝやおあ下あとをふ
まゝん 補 古哥「陸奥のひたの繩手の馬さとりうたての月のやどりどころや
補 うまき（後拾）年比一り侍ねるうまきのうれへある事ありて云々
うまゆゝ 馬弓（空穗祭の使）七うまつこのさの御馬ゝ右近のせうよりもゝ下めてもひの
りつゝうま弓つゝうまつるうまゆみもてゝとねりともこまゝらゝつきて舞あそぶ
うまー 廿（催馬樂）大芹おゝせりハ國のさゝものゝ小芹こそゆでゝもうまー云々
うまーきよ（竹取）十二おんでふ心ちをれバこのく物を思ひたる樣ゝて月を見給ふぞう
まーき世ゝといふ
うまひと（三代實錄）七、廿三 艮家稚子
うけ 受（宇治拾）下七ひつめの橋のもとにまこりて昔をうけはべるあり（古）戀一、よみ人しらす
「戀せゝとみゝらー川にせーゝそぎ神ハうけぞゝりゝれらーも 補（今昔）九廿さゝづ
きをとりあゝてうくゝこのりゝうけてのむゝ（宇治拾）三さけをひとかもらハうけて
もちながら云々そのうれゝさるされを（後拾）雜五爲賴「もちながら千世をめぐらんさゝ

づきのきよきひゝりハさーもうれおん
うけ 泛子（古）戀一、よみ人しらす「いせの海につりをるあまのうれなれや心ひとつをさゞめ
ゝねつる（六帖）おもひわづらふ「あゞ人のをこつり竿のあやふきにうれひくことのかた
くもあるかな 補（和名）百九十四 泛子云々 泛子釣別名也漢語抄云宇介今按綱具又有此名
故別置之
うれ。答ヘトイ所ニ（狹）一、下十八ゝちまちのうれハいせねゞ
うけゝり。オシハレタル也（枕）五ノ十一。郭公聞ニイキ後ノ「后「下わらびこそ戀ーかりれれとかゝせ
給ひてもといへと仰らるゝもそゝらー清「郭公尋ねて聞ーー聲よりもとかさて參らせ
たれバ后詞、ワラビノミいゝどううけゝりたりやかうまでたゝいかで郭公の事をゝけつら
んと笑ハせ給ふ（源東や）七源少納言讃岐守おどのうれゝりゝる景色ゝて出入らん
ゝ（同桐つぼ）廿五人もえおとーめ聞え給ゝねバうけゝりてあゝぬ事おー（狹）三、下四十一
さるべき上達部おぞうれゝりてあそび給ふゝまハさいいへどおまめゝーく（源わ
かな）上、七十三我身ハけゝうけゝりていゝどかるべきゝハゝハあらざりれるを（同さか
き）七庭のたゝぞまひもゝゝまえんおる方にうけゝりたる有さまおり（同みゆき）廿
やんでとなき方〳〵を憚りてうけゝりてそのつらにもゝてなさぞ（增鏡）六春宮太

夫こそいとうけばりてめでたく侍るよ（源さかき）五十 猶そのもゞかりありてうけ
ぎりたる女御おとゝいもせ侍らぬをゞよあらぎくちをしう思ひ給ふるよ（同わか
な）上ノ廿五 御たうぎりのそふおどこそ皆同じゞでとおりゐの帝とひとしくさゞまり給
へれぞまゝとの太上天皇の儀式よいうけぎり給むぎ（枕）四ノ一 六位の藏人のあを色な
どきてうけぎりてやり戸のもとよそばよせてえたてらぎへいの前おどまうしろを
して袖打合せてさちたるこそをかしけれ（源繪合）五 うゐぎりさるおやざまよいき
こしめされゞと（同えつ音）十四 うつせみのあま君よものさしのぞきたまへりうゐぎり
たるさまよいあらぎかこやゝよ局住よしおして（榮松のしつえ）六 後冷泉院よかや
うのことおむしまさましゝば又みこおむしまさぎともうけばりてかくいるてなさ
せ給いざらまし 補（源若菜）下三 とねりぞものうけぎりていとるむゞんおりや（同同）
上七 十七 よくらゝにもうけぎらぬなどをゞめぬ人おし（同同）同卅六 大將したりゞゞよて
かゝる御おゝらひようけぎりてものし給ふも

うけとり（源東や）十六 守のかくおゐたゝしき事よ思ひてうゐとりさわぐめれば（同
かしい木）十六 限りおううしろやをくゆづり置給ひし御事をうけとり給ひてさしも心
ざし深ゐらぎ云々（古事記）中 此時熊野之高倉下齎一横刀到於天神御子之伏地而
獻之時天神御子即寤起詔長寢乎故受取其横刀之時云々（源繪合）二十 いづれゐいさま
ざまとりゞゞのさえおらいせ給いざりけんその中よもとりたてたる御心よいれて
つゝへうゐとらせ給へるかひありて（同わかな）上廿 いくむく立おくれ奉るべきとて
ゐ其御うしろみの事をばうけとり聞えん（宇治拾）八ノ十三 軍ども悦べるけしきよてう
けとらんとをる時（同）九三 そちのくよゝて金うけとりて歸る時（同）十四ノ十一 唐人玉そう
ゐとりて（源松風）五 そのゝち物おどおゐくうゐとりておんいそぎつくりける（百
錬抄）五 廷尉於川原請取（勘解由式）三 副之官符更下使局使局受取領行 補（風雅）秋中
爲兼 「月のいろも秋よ染おゐ風のよの哀うけとる松のおとかな（著聞）十二ノ廿三 もやくう
ゐとらせ給へといふ（宇治拾）十一ノ二十 川原をくだりよむしるをつどひたるものどもう
けとりゝ打ゐれば

うゐさまいりおげく（源わかな）下ノ百二 月比のたゞよ覺しおやむ御事うゐたまもり
なげき侍りおがら

うゐがふ（落くぼ）二 けふい御忌日おるものをおよのうけゞひあらんといへども

うけたまいり（續紀）四ノ二 立賜比敷賜覇留法乎受被賜坐而（續後紀）一ノ十六 大命乎受賜乎
（祈年祭）六 神主祝部受賜

うれたまいりぬ（源こてふ）廿四御ゝへり聞えざらんも人めあやしければ云々さぐうけ給いりぬみだりこゝちのあしう侍れば聞えさせぬとのゝあるに（同帚木）卅四きのかゝは仰でと給へばうけ給いりおがらしりぞきて（同同）卅さるべからん雜事らいうけ給もちん補（宇治拾）七ノ十四物おどくひてまゐれといへばうけ給もりぬとてゐたるほどは

うれさまいりおやむ（源夕かを）四十七うれ給いりおやむをことは出ていえこそ

うれさまいりさまいねば（源すま）十八おく〳〵申給ひても其あとわりをあらいにえうれたまいり給もねば

うけたまいりさまふ（榮月の宴）十三東宮はいれ誰をかと御けしき給いり給へば云々五宮をおんしこの思ふとおほせらるればうれ給いり給ひぬ

うれたまいりしる（枕）一八うけ給ハりしるべくも侍らざりけり

うれたまもる（源さかき）廿三。文詞いらせ給ひはるをめづらしきことゝうけ給いるは（同桐つぼ）十二おがしつゝまぬはもあらぬ御ゝしきの心ぐるしさはうけ給いりもてぬやうはてなんまかで侍りぬるとて（同末つむ）五ことの音いりはまさり侍らんと云々えうれさまいらぬこそ口をしれといへば（同紅梅）七月比何となく物さわがしきは御琴の音をぞうれ給もちで久しくおり侍りはけりうけさまいる。承知聞イル、（竹取）十一國王の仰ことをまさに世はそみ給いん人のうれ給もらでありおんや（同）十五宮づかへつかうまつらもおりぬるものく煩いしき身はて侍れば心えておがしめされつらめども心づよくうけ給もらぞなりにし事補（宇治拾）一卅このへんの下人うけさまもれ（源桐壺）十一けふもどむべき祈どもさるへき人々うけたまもれる

うけたまもらぬ（狹）三下四十三。キンノ琴御覽しつけてひきやませ給ふを久しうう[illegible]さまもらぬに猶と申給へど

うけたまいらまをし（源蓬生）十九たしかはおんうけ給いらまほしき

うけたまいらど（源夕きり）五十六大和守も更はうけ給もらど

うけつ（竹取）二人の心ざしひとしのおりいかでか中はおとりまさりいしらん五人の人の中にもかしき物を見せ給へらんは御心ざしまさりたりとてつかうまつらんとそのおもひらん人々は申給へといふよき事おりとうけつ

補うけおも（山家）下「もらかつるおをわたざきのうれなもわ心らけつゝ過んとぞおもふ

うけられ（源みのり）十あやーきまでそゞろある人まもうけられもかおくーいでたまふことものあまよでとまつれても世まほめられ○注ウケヒカシタル心也○宣長云事ノタヲヒデカケタル方ノナクシテ憚りヘツラフベキ所ナキ意也

うけられ（源東や）七守まものをさ〳〵うけられぬさまはてまゞらいんなんいと人げおのるべきとのまさふ（同みのり）廿そゞろある人まもうけられもかおくーー出給ふことも何事まつれても世まゑめられ心にくーー

うけん 有驗（宇治拾）十二、七叡實といふ持經者なん云々それよりぞ有驗の名いたのくひろまりけるとり（源東や）九さにがまその御願ひいあゞちあるやうまてをさをさうけられ給もでけおとりておもーかよもんまと

うけんべり 雲綱（枕）八、九昔覺えてふようある物、うけんべりの疊のふりてふー出きさる

補 うけのを（万）十一、廿七「そそのえのつもりあひきのうけのをのうかれらゆかむあひつゝあらぎば

うけく 憂（古）雜下、よみ人しらす「よの中のうけくまあきぬおくやまの木のもゑふれるゆきやけおまー 補（新拾）戀二、常磐井入道前太政大臣「うらミても年ふるあまの釣のをのうけくまうかぶおもたとそーれ

うけふ 呪詛（古事記）十一、十五各宇氣比而生子故爾置天安河而宇氣布（万）十一「氷のうへまかぎかくでとき我命いもまあもんとうけびつるりも（源藤ーかま）二いので人笑へなるさまま見聞おさんとうけび給ふ人々もおゑく（同蓬生）九大將殿もやんでとおくーもおもひ聞えさまいドおどゑんドうけびけり（古事記）中卅科曙立王令宇氣比白因拜此大神誠有驗者住是鷺巢池之樹鷺乎宇氣比落如此詔之時宇氣比其鷺墮地死（同）上、四十九使石長比賣者天神御子之命雖雪零風吹恒如石而常堅不動坐亦使木花之佐久夜比賣者如木花之榮榮坐宇氣比豆貢進 補（万）四、五十六「都路ととはゞや妹ゞ此でろい得飼飯てぬれどいめまま見えこぬ（同）十一、「さねのづら後もあむむと夢のみまうけびわたりて年いへまつゝ（同）二十、「あひおもいぎ君いあるらーぬむ玉の夢まもみえぎうけびてぬれど

○うけいーけ（源紅葉賀）十三あきでんおどのうけもーげまの給ふと聞ーを（同若菜）上ノ廿二式部卿宮のおゑ北方常まうけもーげおる事どもをの給ひ出つゝ

○うけへば（伊せ物）卅一段「罪もおき人をうけへばわそれ草おのゞ上まぞおふとい ふおる

○うけびのろひ（空穂國ゆつり）下ノ廿一あかまやこの君の御ともおぞきゝていき集りてうけびのろひぞせんとて

うれて（万）浮五、四、長歌十一中のこをとゆ舟うれて（源藤のうらと）廿四ひがゝの池は舟ぞもうけて

うれふね（浮舟（夫））廿五「むこの浦の沖のうけ舟ちかづれば友さそふありあでのよび聲（同）「あドろぞぎむぞぶの浦のあさひのげてるかは出るあまのうれ舟

うけひく（拾）神樂祐舉「こそぎそるけふからさきはおろをあをゝ神のうけひくゝるゝなりれり補（源わかな）上ノ廿九うれひき申給つ

うれひかぎ（源夕きり）廿もむらうけひかぎと頭ふりて只いひはいひたゝてゞ（同帚木）廿七あはがゝより初てうけひき侍らぎゝど申（同桐つぼ）廿世のうれひくまどきことゝれば（同夕かは）九人のうれひかぬをぞはてだにゝをさりぬべきあさりの事ゝ（兼盛集）十四「我戀ゝいをゝき淵の鉤ゝれやうけもひかれでやこぬべらゝり（同）十六「つられれど猶ぞゝひつる水無瀬川うけもひかれぬ身とゝゝる〳〵（六帖）三「いせの海は鉤をるあまの魚をゝみうけもひかれぬ戀もをるかゝ（源わか紫）六さる心ぞへこすゝれぞさらにうけひかぎ補（隆信集）「いゝはせんゝもひゝふかゝいせの海は鉤をるあまのうけひかぬ身を（堀川院艶書合）「おくあこのうれもひかれぬものゝゝは何ゝゝあまの袖のくつらん（同）「うけひかぬあまのをぶねのつゝでなゝたゆとて何ゝくるゝかるらん

うれもちのこの（保食神）（神代紀）廿保食神此云宇氣母知能加微

うぶや（産屋（神代紀）下ノ廿四）爲我作産室（ウブヤ）相待矣（枕）二、一をさまドき物、兒のなくゝりさるうぶや云々聟とりて四五年までうぶやのさわぎせぬ所（拾）賀贈皇后宮の御うぶやの七夜は云々（同）藤氏のうぶやにまかりて（同）ある人のうぶやはまゝりて（源かしゝ木）御産屋の儀式いゝめゝうおとろ〳〵御かたゞ〳〵さまゞ〳〵申いで給ふ補（新千）廿うまでのうぶやはちでのきぬやるとて（源とこ夏）廿一妙法寺のへたう大とこのうぶやは侍りける

うぶやゝゝゝひ（産養（榮さま〳〵）十六）三日のよい本家五日のよい攝政ぞのより七日のよいきさいの宮よりとさまゞゝいをドきおゝんうぶやゝゝゝひなり（大鏡）七御うぶやゝゝゝひの日大宮せさせさまへりゝ夜の（古事談）一後朱雀院御誕生五夜產養之時（榮日蔭のかつら）御うぶやゝゝゝひ三日のよものせさせたまふ（禮記）内則云國世子生告于君接（ウケヤシナヒニ）以大罕（ヒ）（源あふひ）廿二こかんざちめのありおきうぶやゝゝなひどものめ

づらゝまいかめしきを（枕）二、四うぶやゝおひ馬のむかむけなどの使まろくかどとらせぬ云々（榮そつ花）御うぶやゝなひつゝうまつる補（紫日記注）云うぶやゝおひとゝえこうまれさせ給ひて三夜五夜七夜九夜とあること也ものまえたるえかゝゝ

り（空穗國ゆつり）上、一十四とおろ〳〵より御うぶやゝおひゝ給ゝぬかゝ

うふぎぬ（狹）四、下四十三いとちひさくをかゝげかる小からびつを取出てこれあかゝゝこおろゝにゝ給むで云々御うぶぎぬやむこのゝの人のかきをさひ給へりゝをどもかどのやりをてんゞをゝかりゝどもをとりおきさりゝ也（同）四、下四十四御うぶきぬのありけるを先古ナシとりいざゝて御らんぜるまわがきさりゝん物ともおぼされぞ物げかく哀げかるまつけても

うぶをな（推古紀）廿七葛城縣者大臣之本居也（三代實錄）七ノ廿三改本居貫附右京職（同）四十八、十三秦忌寸氏立父子六人改本居貫附左京四條二坊

うでく（源よもきふ）十四されどうでくべうもあらねばよろづにいひ煩ひくらゝして（同）十八をたれうでくゝゝきなり（同わけまき）四十八我心のやうに云々それざに猶動きそめぬるあたりゝえこそ思ひさえね（狹）三、下四十七わかき女房などゝうできざまえせぞ死入りさるやうまてこかうつぶゝふゝたり（同わゝ紫）十九ひゝりうできもえせね

ど（同夕きり）廿二そなさへ參りくべれどうでくべうもあらでかん

○うでかぬ（和泉式部集）上「うら山ゝさもわがむねのさわぐかかいのなる人の身ゝうでかぬ

○うでゝを（古）序天地そうでゝを（拾）神樂よしのふ「ゝふよりゝいむくら山ゝ万代を感動末都流倍岐

○うできなく（源玉葛）四十七おくれさるかさのいとゞかゝ〳〵うできをべくもえざりゝゝば（榮玉のむち菊）廿一御身ゝいとゞさのえまさらせ給ふやうにて云々うできかくおもゝまに（源朝ゝは）十五更にうできかき御心なればあさまゝくつらゝと思ひ聞え給ふ（同ゑ合）十五さゞ見るまにいまをこゝうできなくみ奉らんとおもふかど云々（同紅葉賀）廿一母宮をだにうできかきさまゝおき奉りて

○きこえうでかす（源さわらひ）十八えゝひても聞え動かゝ給ゝざりけり（同夢のうきゝし）十七さをゞゝまむくつけき御心まこそと聞えうでのゝて木丁のもとにおゝよせ奉りたれば

補 うこかゝれる（天神壽詞）集侍豆（ウコナハリベリタ）（大祓詞後釋）上、十八ニ（ウコナハレル クハシ）集侍

うて　擲（古事記）上ノ廿一　ぬをたまのくろきをけーを曾邇奴岐宇氏（御衣　其　脱　擲）

うてゝ（高光集）たゞきよの衛門督五せちたてまたし給ふよたきものかうをーうあはをとてそらさき物をこーとたふの峯よこひ給へるよ橘のなりたる枝よ實をとりうてゝそれよいれてさてまたをとて○契云さてまたをい奉るゆりとりうてゝい實をとりをてゝゆり又取出つをとうづといふも是ゆりとうとともに五韻にて通せり實をとりをてゝ皮よつゝむ也古語に捨るをうつるといへり神代紀のふきうつるも是なり

うて（著聞）十六九　今一度とらんとて又よりあひてとるよ此たびい壇光うてよけり○ウテニケリハ負ケニケリ也起請ウテゝナドイヘルガ如シ（盛衰）廿三十七　我身の起請よ

うてゝ世よあるをときゆゑゆゆゆ（同）卅四卅一　ゆゝーく見えつるをるををもをさゆいれづきよ逢たれゞむげようてゝぞをえたりける補（伊勢集）人のもとゆ秋まかりていと夜ふけて歸りきてつとめて「ふけーよの行あひの霜ようてーかどゆど身よさむくあたらざりけむ（平家物）とさ坊を大庭よ引をゆさせいかよとさをうきゆやうよいもやくゆうてたるぞかーとのたまへゞさん候ある事よかいて候へゞうてゝ候と申す（賀茂保憲女集）「くれゆゆのせにゆがれめや菊の花霜よゆうてぬいろぞかゆしき

○うてぬ（和泉式部集）「まことゆとくらべてみれゞ我やどの花のつゆよい猶うてぬめり

うてゆ臺（源すゝ虫）四　「むちををとおゆどうてゆと契りおきて露のわかるゝけふぞかゆーき補（万代）秋上　定嗣　「蟬のゆゆる虫のうちをぞ聞ゆゆる松のうてなの秋のゆふぐれ

うてのつかひ討手の使（大和物）二野大貳をとゆもゞさわぎの時うての使よさゝれて少將よてくだりけり

うさ（源帚木）四十三　「身のうさをなげくよありてあくる夜ゝとりかさねてぞねもなかれける

補　うさぎま兎馬（夫）四仲正　「山櫻きゆひたづぬる人數よ身をうさぎまのうゆゞーぞゆく

うき（新續古）戀四知家　「さのをやいうきよ年へんうきくさのねもをぬ人をおもひたえゆで（宇治拾）十三二　人も濟ぬうきのもふ〳〵とーたる一町をかりゆるうきありをゆい買ふともあたひもせトと思ひて只をこーよかひつぬーい不用のうきなれゞ畠よ

もつくるまゝ云々あけをのぬゝ此うきをかひとりて云々（六）三（拾）戀四「あゝねむ
ふうきゝ上こそつれなけれ下ゝはならぬおもふこゝろを（同）「何事もいたれざり
けり身のうきはおひさる蘆のねのこなかれて（同）「あゝのねのよさき心ゝうきで
とはまづをれふゝてねぞなかれける（源玉かつら）卅五「數ならぬみくりや何の筋な
れゞうきにゝもかくねをとゞめけん補（續後拾）戀二讀人しらず「うきはおふる蘆のねは
のみなかれつゝいきてよはふるまゝちこそせね（同）同九條右大臣「よのうきはおふるこ
くりのこがくれてなかるゝ事ゝとれもさえせぬ（新續古）廿長歌澤田のうきにせく
水のふかきはでりはおそゝるゝ（金葉）戀上顯仲「おのづからよがるゝ床のさむゝろは
なこだのうきになるとゝらぬや（同）同公實「あゝねむふ水の上とぞおもひゝをうき
ゝわゞ身はありけるものを（山家）上「五月雨ゝ行べき道のあてもなゝをゞゝが原
もうきはなかれて（續千）戀一爲家「うきはもふあゝのゝさねのみでもりはかくれて人
をこひぬ日ゝなゝ
うき 体の語（源みをつくし）十九女ゝうきはこりて給ひて
うき（源桐つぼ）十一今までとまり侍るゞいとうきをかゝる御使の蓬生の露わけ入給
ふはつけてもづかゝうなんとて（草庵集）「人をなやうらこやせまゝなべて世は

うきをいとたぬならひありせば
うき 憂ウレヘノ所ニ
補 うき 盡（記傳）四十二卅四
うき 浮（千載）戀五小侍從「君はふとうきぬる玉の小夜ふけていかなるつまはむすばれ
ぬらん（源わか紫）十七「あやゝううきたるやうはてとゝ月をこそかさね侍れ（同ゐふ
ひ）十四「御はゝゝちもうきさるやうは覺されてなやまゝうゝ給ふ補（千載）戀五實房「はひ
わぶる心ゝ空はうきぬれど泪の底は身ゝゝづむかな（濱松）二下「なこゞのうき給ふめ
るゞ女もあもれにおゞえて
うきも（山家）上（夫）九「夕立のもるれゞ露ぞやどりける玉ゆりそうるもそのうき
もは補（玉葉）夏院御製「こゞれおつる池のもちもそのゝらつゆゝうきもの玉とまさ成
はけり（新拾）夏後成「野べはおくおなゞ露ともえぬかな蓮のうきもはやどるゝら
玉（新後拾）夏後鳥羽院「風をいたこもそのうきもはやゞゝめて涼ゝき玉は蛙なく也
うきもゝ 浮橋（源みをつき）三「うきもゝのもとなどはもあのまゝうたちさまよふ行幸の道
の橋あり（神代紀）上四「立於天浮橋之上（後）戀六「さえざりゝ昔ざにこゝうきもゝをいまい
わたるとおとはのこきく（六百番）奇橋戀顯昭「いさやさゝ君はあゝゞゝわさらゞと身

をうきもーまかきつはてそん補(万)十七長哥云々よど瀬まゝ宇枳橋わたー云々九

補 うきぬるたま(千載)戀五小侍從「君こふとうきぬるさまのさよふけていりなるつまゝむそをれぬらん

うきぬなは(拾)戀二、よみ人しらず「おき事をいもれのいはのうきぬおもくるーき物ゝよゝこそありけれ補(後拾)戀四小辨「我こひゝまゝざの池のうきぬおゝくるーくてのみとーをふるのあ(同)戀一内馬侍「いかなればーらぬまおふるうきぬなゝくるーやあゝろ人ーれぞのゝ(新千)戀四源守「さゞめおき人のちぎりのうきぬおもくるまつけても袖ゝぬれつゝ(新後拾)雜上爲道「よの中ゝくるーきものゝうきぬおゝうきをもーさまおもひみざれて

うきよ(金葉)雜上行尊「もやき瀬またえぬをかりぞ水車われもうきよまめぐるとをーれ(伊勢物)「ちればあそいとゞさくらゝめでたれうき世まおまのひさーのるべき(源末つむ)十五心からなどかう浮世を見あつかふらん(白文)六二却忘人間事(同)十二、十四人世補(玉勝間)四、二説あり

うきたる(遠鏡)ニ落ツカヌ思ヒノアル(古)戀一、よみ人しらず「朝あ〜〜さつ河霧の空にのみうきて思ひのあるよありれり(後)戀三黒主「玉つーまふゝき入江をこぐ舟のうきたる戀も我ゝそるかあ(空穗藤原の君)「旅ねをる身まゝ涙もおからなん常まうきさる心ちのゝそる

うきたるふね(後)戀三(六帖)(小町家集)「心からうきたる舟まのりそめてひとひも波まぬれぬ日ぞなき(新古)雜下匡房「さそらふる身ゝさゞめたるかたもおーうきたる舟の波にまかせて

うきさるあと(後)戀二女の母「天雲のうきさることゝ聞ーかば猶ぞこゝろゝ空まなりまー(源松かせ)八あゝら契りかもーてつもりぬる年月のゆゑを思へばかううきさることをたのゝてそてー世まかへるも思へばむかなーや(狹)一、下五かくいとうきたる事と思ひ給ふともおからべてゝ心のゆゑも今ゝ給ひてん(とりゝへもや)三、十六内侍

大將女ニナリシヲ見ツケシ所ニ

められぬべければねんゝて見るま(源せきや)初筑波根の山を吹こゝ風もうきたる心ちーていさゝかのつたへゞまおくて年月かさなりまけり

補 うきたから(日本紀神代卷)浮寶ウキタカラ鈴屋翁の訓

うきたつ(源まきはしら)十三くれぬれば心も空まうき立ていのでは出おんとおもゝにまうきつ(堀次)「衣手のうきつまぬれて歸るかな秋ふく風まの波たゝなくに○注川ま

いつといふ物有此哥衣手のうきつとつゞくるい袖にうかべるつらき涙といふ心也

補（新勅）秋上敦仲「天の川うきつの波にひこ彦ーの妻むかへぶね今やあぐらー

補 うきつち（山家）上「さゝざれよ小田の早苗やいかゝらんあせのうきつちあらひこされて

うきね（千載）哀傷國信「あやめぐさうきねをみても涙のゝかゝらん袖を思ひあそやれ

うきね（古）戀一、よみ人しらす「涙川まくらかゞるゝうきねよい夢もさだのにえぞぞありなる（源帚木）四十二いとかうかりなるうきねの程を思ひ侍るよ（後）冬、よみ人しらす「冬の池の水よ流るゝあー鴨のうきねながらよいくよへぬらん（六帖）三「人でとのーげさまされゞ水とりの鴨のうきねのやそけくもかーー（万）十五、六「海原に宇伎ねせむよい沖津風いさくな吹そ妹もあらなくよ（同）四ノ十五「敷たへの枕もくゞるかみざにぞうきねをーなる戀のーげきよ

うきか 浮名（源あふひ）卅一つひにうき名をさへかゞーむつべきことゝおぼーみたるよ（狹）二、上卅七いかさまにーてうき名をもてかくーて（同）同卅九「吹むらふ四方の木ゞらー心あらゞうき名をのくそくまもあらせよ（源こてふ）廿四かうやうのけーきのもりいでゞいそどう人わらもれのうきかよもあるべきかか

うきかゝ（源あかし）四十「とーへつる苫やもあれてうき波のかくるゝよやそをたぐへまー

うきくも 浮雲（千載）釋教公任「定めかき身い浮雲よよそへつゝむていそらよぞかりもてぬべき（淨名經方便品）云是身如浮雲須臾變滅

うきまくら（夫）廿二家隆「秋ふかき玉江のおきのうきまくら人いいづらよ月をそるらん 補（新後撰）戀二、醍醐入道前太政大臣「池水よつゞいぬをーれうきまくらからぶかさかき戀もそるかかゝ（壬二）下「うき枕かゝそよなみーく袖の上よ月ぞかさなるなれーおもかげ（續拾）旅家隆「奥つなゝよそる磯べのうき枕とゞざかるかり汐やそつらん（新拾）旅覺寛「衣手をーきつのうらのうきまくらかゝざよなゝもかれぬよぞかき（同）同行氏「うきまくら結びもてぬめぢよりやがてうつゝよかへるかゝかゝ（新勅）旅、後京極

攝政前太政大臣撰）戀四忠宗「うきまくら風のよるべもーら波のうちぬるよひい夢をざよ見ぞ（新後「波こゆる袖のみかとのうきまくらうきてぞひとりねいかれける

うきませ（濵松）三廿「云々との給ふ有さまうきませのきむざよいかよせんほどい口そーかるべうもあらざらんよまーてえからぎかまめかーうめでたきを（同）二ノ廿一いと及びかく心つくさゞらんうきませのゞぞいかやうよ心うつくしうかよゝのならん

とぞ思ひとゞめらるべきわざなれなぞ（ソ）（とりかへたや）一ノ十六さらぬうきませのほど（ウカ）
いーらぞ顔ゐて聞すでー

うきふね（和泉式部集）上「その方とさしてもよらぬうき舟の又こぎたれおもふ
ともなー

うきふー（源帚木）十九「手をゝりてあひみーことを數ふれバこれひとつやい君ゞう
きふー（同）「うきふーを心ひとつゐのぞへきてこや君ゞ手をわのるべきをり（同
紅葉賀）九宮の御けーきもありーよりいいとゞうきふーゐおゆーおきて心とけぬ
御けーきもむづゝーう（古）雜下、よみ入しらす「よゐふれバ言のむーげき呉竹のうきふーで
とゐうぐひそのなく

うきてゆ（後）戀一、よみ入しらす「水上神イゐいのるゝひなく涙川うきてゆ人をよそゐ見るゝな
（拾）雜上、贈太政大臣「あまつゆーそちゆやどりもありながら空ゐうきてもおもゆゆる哉
（源玉かつら）十四「ゆくさきもそえぬなそ路ゐ船出ーてのせゐまゝそる身こそうき
たれ

うきゝ（躬恒集）「秋のなそいさくなたちそおもゆえぞうきゝゐのりてゆく人のた
め（源まつ風）十一「いくかへりゆきゝふ秋をそぐーつゝうきゝにのりて我かへるら
ん（夫）廿六「海原や雲ゐむるかゐこぐ舟をうきゝゐのれる人ゝとぞ見る（源手習）五十
一「心ゐそうき世のきーをそなるれどゆくへゆーらぬあまのうき木を（小大君集）
「天の河うきゝゐのれる我ならバ君ゞあたりに今いきなまー（狹）四、上廿二うきゝゐあ
いん事よりゆゝたき事どゆかなと忍ひて聞え給へと補（万代）秋上うきゝをよみ侍け
る實方朝臣「天河かよふうきゝゐ年をへていくそゝへりの秋をーるらん（月清）三
「久ゝたの天の川よりかへるらーくだにうき木をおくる月ゐけ（万代）戀一、宰相内侍「た
ぎちゐいされゝふをゝん天の川うきゝゐのれるよいゝもむるとゆ（玉葉）夏公雄「五月
雨にうき木ゐゞれて大井川くだに筏の數ぞそひぬる（續千）釋教賴輔「あひゞさき法の
浮木をえゐる身いくるーき海ゐ何ゝーづゆむ（新千）同花園院「いさづらにくるーき
海にーづみゐバ法のうき木ゐまたゆあためや

うきめ（古）雜下「よのうきめそえぬやまぢへいらんゐいおもふ人こそゐたーゐり
けれ

うきみ（源帚木）四十一いとゝくうき身のほどのさざまらぬありーゐゞらの身ゐて補
（草庵集）「うき身とい何ゐげくらん數ゐらでふるこそやそきゐの世ゐりれ（同）
「あさゝらぞちぎるゐつけてうき身ゐいゐいつもりれほとぞーらるゝ（新古）哀傷
イヤシキ身也

左近中將通宗ゲもり所ゴまりてよゑ侍りける（土御門内大臣）「おくれゐて見るぞりあーきもりなさをうき身の跡に何たのゑけん（ヒイ）○これもかあーゑのあまりゴゑづからの御身をうき身との給へるなり賤き意ゴいあらぎ（新古）（戀二俊成）「うき身をば我ざゴいとふいとへたゞそをだゴ同ど心とおもいん（美濃家つと）うき身といいやーき身をいふ賤き者いうき事多ければ也（尾張の家つと）述懷の歌のうき身の說ざま也それをら官位もよろーきはぞ家もとみ身も榮ゆるゲ一事一言ゴよりて身をうき物ゴおもひ入も常なればうき身を賤き身と定ていひがゑーまーてあれい戀の哥ゴて貴賤の論い物遠ーうき身といいとをゝ身也人ゴいとをゝ故わが身のうき也いとふといひうき身といへばたゞゴーのきあゆるゑざぞ○廣足云正明說さる事也（源花の宴）「うき身世ゴやゲてきえあば尋ねても草の原をばとをゝとや思ふ○これ朧月夜の君の歌なればさらゴいやーき身にあらぎたゞ戀のうへゴとりてのうき身也○うき身い數あらぬ身をいふ也憂身ゴいあらぎ（草庵集）「ことわりをうくなる神ゴゑそぎーてうきをいとふと何ゥあつらん（千載）（戀五隆親）「おもひーる心のあきをかげくかあうき身ゆゑこそ人もつらけれ（源わゥ紫）「世がたりゴ人やつゑへむゑぐひあくうき身をさめぬもめゴあーてもO こいふぢつゲの御うゑあればもと

より賤ーき身の事ゴいあらぎ源氏ゴ逢給ふそうき事におもひ給ふよりうき身といへるあり（新後撰）（雜上道供法師）「我ぞかりまつとといいもゞ山ざくら花もうき身をいとひもぞする（千載）（戀五祐盛法師）「つらーとも恨るかたぞあかりれるうきをいとふい君ひとりかい（續拾）（戀五定經）「されをかい身より外にいうらむべきうきをいといぬ人ーなければ（新古）（戀三小侍從）「つらきをもうらゑぬ我にあらふあようき身をーらぬ人もあそあれ

うきみる（伊勢物）（八十七段）うきゑるの波によせられゑるひろひて家の内ゴもてきぬ女方よりそのゑるそゑりつきゴもりて

補 うきーづゑ（續古）（秋下伊勢）「うきーづみ淵瀨あがるゝ紅葉いふらく淺くぞいろもゑえける（夫）（廿七家隆）「戀をのゑをさの入江ゴをむ魚のうきぬーづゑぬあぢきあの身や

うきもん（浮紋）（源ゥふひ）（十一）うきもんのうへのむかまゴ

うきもの（源みをつくし）（廿）うきものい世ありけりとおゲーあゲく（千載）（哀傷前中宮宣旨）「うきものゝさをがゴをーきあとーかな遠ざかりあん君がわかれゴ（源みをつくし）（十六）乳母ノ心 あもれかうこそおもひのあかにめでたきをくせいありれれうき物い我身ゴこそありれれと思ひつゞけゝれぞ

うきせ（源てならひ）卅七「むかゐくて世まふる川のうきせまい尋ねもゆかゞ二もとの杉

補 うきを（新後拾）冬具通「下くゞる道とみーまに鴉とりのうきをかけてあやるいけ水

補 うめがえのさか（万代）「うめがえの花に木づたふうぐひすの聲さへまゑふ春のあけゞの（同）春上宮内卿「梅がえの花のありかゝーらねども袖あそまゑへ春の山かせ

○廣足云これらの梅がえの花いたゞうめの花といもんがでとー枝ゐい心かー

うめく（源末つむ）十八「かまおとまつけてかゝ御心のとまらんうちうめられてよふかう出給ひぬ（同）卅六いでやとあいかくうちうめられさまふ（同）卅二かゝるわざい人のそるものまやあらんとうちうめき給ふ（同）帚木五まことかと見もてゆくまみおとりせぬやういかくかんあるべきとうめきさるけーきもむづかーゞかれば（枕）三ノ卅一。供ノ従者ノ主ノ歸リオツキトマツ所又さい色まは出ていえいもぎあると高やかまは打いひうめきたるも下ゆく水のといとをろー補（榮もふして）とものそれバもーぢかまうちかゞめてうめりせ給ふ。歌を考る事也（狭）四ノ上いでや今さへかゝれバぞりーとうめきかゝるを（宇治拾）三ノ十三返ーせんとおもひてこゝとうめきけれど（著聞）廿ノ廿三牛よでとまりからきうめく事侍れり其うめきでる

うめきぞんー（枕）四ノ廿九。雪山の所もやうゝせ侍りにけりといふまいとあさまーをかーうまを出て人まもかたりつさへさせんとうめきぞんドつる哥もいとあさまーくかひなく云々

うみづら（源わか紫）十五さる海づらまは出給さる

うみのなかのりうわう（海の中の龍王）（源すま）五十さい海の中の龍王のいとい さう物めでをる物まて見いれたるかりれりとおゞをまは

補 うみのおきな（新續古）誹諧人のえびを乞におこせるありれるまゝ十九やるとて大中臣能宣朝臣「世の人い海のおきなといふめれどまざたたちまもたらぎぞありれる○海老の文字をうみのおきなといへり

うみのおもて（源わか紫）四さゞうみのおもてをみわさーたるほどかんあやーくこと所に似ぎ補（山家）下「山もなき海の面またかびきて波の花まもまげふーらくも（同）上「月をみてなぎたるうみのおもてかな雲の波さへ立もかゝらで（枕）十二ノ二風いたうふき海のおもてのたゞあれまあーうなるに（源すま）四十九うみのおもていふばまをむりたらんやうま（壬二）上「あれくらー波ともこえぬ冬の日まは海のおもて

いゆく舟もなし

うゑやま　海山（源みをつくし）十四「されよより世を海山よ行めぐりさえぬ涙にうきしづむ身ぞ

うゑまつ　ミル也（土佐日記）「おやつかあれふい子の日のあまあらば海松（ミマツ）をさよひかまーものを（夫）廿九「うできあきいもはよねざをうみまつのちとせをたれよ時のよをらん（和名）海松ミル○ミルハ髪ソキノ具ニモ用ヰテメデタキ物ナレバ引出玉へルナルヘシ（源みをつくし）十五「うゑまつやときぞともあきらげよるてあよのあやめもいろよわくらん

うゑーる（父子相迎）上蟲うゑーるをたゑてむあめき

うー（伊勢物）四段猶うーとおもひつゝあんありれる（源帚木）十八まことようーあども思ひてたえぬべきけーきあらば（後）夏、よみ人しらす「うとまーき君ゲ垣根の卯花いうーと見つゝも猶さのむらあ（源帚木）四十二あぐさめがさくうーとおもへれば（同帚たる）初　りの監ゲうかりーさまよいあぎらふべきれもひあらねど

うー（履中紀）四大人何憂之甚也（神代紀）下大人此云于志○これい中世よい用るぬ詞よてええさる事なー

うー　牛（土御門院御集）「此でろのーづゲ田かへをからをきのうーと思ふもちからなのよや

うーろ　後（源夕かほ）四十四あき御うーろよくちさがあくやむと思ひ給ふる計よあん（同かしい木）廿五なからんうーろにもこのかうゲゆるされさらん御とくあ侍るべき（枕）九、五風い云々わらもべの若き人の根でめよ吹折られさる前栽などをとりあつめおおーたてあどをるをうらやまーゲにおしーもかりてつきをひさるうーろもそらー（源夕かほ）卅物の足おとひーくーとふえあらーつゝうーろよりくるこゝちを（同帚木）卅四たゞその几帳のうーろよとの給へば（同紅葉賀）廿七屏風のうーろよ入り給ひぬ（同さかき）廿三こゝかーこの物のうーろあどよぞさふらふ

うーろ（源紅葉賀）十二御ぞの御うーろひきつくろひあど御沓をとらぬをかりよー給ふ（同よこふえ）五御身いいとあらいよてうーろよきあー給へるさまい

うーろいぶせー（盛衰）四十一六でう御てきとも成給ひぬと存と申れれば頼朝もうーろいぶせく思ふ也とてついたうの心をさーいさゝ給へり

うーろへたー（枕）一ノ十二めのとかへてんいとうーろへたーとおゼせらるれば（和泉式部集）二「えこそ猶うきよとおもへどそむかれねおのがあゝろのうーろへさに

うーろをあてゝ（枕）一、六ひさーの柱まうーろをあてゝまあさざままむきておむーまを（榮もとの東）廿九上達部ひがーのをのこまは勾欄まうーろをあてつゝなをゐさせ給へり

うーろむ（狹）一下、六げまおぞろ々まは思ひうーろむ人のむかゝーーーきあくい（同）うーろむる人あからんよりいまのるいゐ衍り

うーろむく（源玉葛）廿七むづかーうてうーろむき給へり

うーろのことと死後（源椎かもと）十五かつを奉るそどたにおもひをつるよをさりあんうーろのことーるべきあとにいあらねど

うーろぐらー（盛衰）八ノ十四きみをもうーろぐらき御事は思ひ奉りて

うーろやをく。安心ノコヽロ也コヽロモトナカラヌナリ（源藤の末葉）十かうもありてなんと心かけわたることあればうーろやをくこちびきつ（元）廿三さねをけの朝臣子生せて侍ーー七夜は「日のもとをうーろやをくぞ思ひぬるくまのちぶさのたのもーき哉（伊勢集）十三（夫）「身にかふる人はも我いあーてーーのうーろやをさをみせんとおもへば（公忠集）廿二「もゝーきの梅のむか笠さをときいあめのーたこそうーろやをれば（元輔集）八「さきそむる梅の花がさかざを身いうーろやをきをよろづよの春（今昔）少將君いをさあくおむをれぞ人のためまうーろやをき心おむーてまことをつげ給ふまこそありけれ（源末つむ）十六さゞおそどのにものーー給ふをぞうーろやをうさーをぎさることい見え奉り給いゞとおもひける（空穗吹上）下八何かいゐて下り給へらーー一人いえものせゞ人々ものーー給ふあれいいとうーろやすかあり（蜻蛉日記）二道綱ノ人となーてうーろやをらん女なぞまあづれてあそーかも心やをからんといおもひーら（榮うらくの別）廿三それが申出さる事なりければおほやけの御ためにうーろやをき事申出さりとてかゝいい給いせさりれればよろこびいひまは父がもとよいきたりければ（六帖）四（後）賀伊衡「万代のーもまられせぬーらきくをうーろやをくもかざーつるらあ（後）戀一男のあとまと女むかふるををて親の家まりらへるとて「わられをばらあーきものときゝーのどうーろやすくもおもをゆるらあ（蜻蛉日記）四、文詞物ゐをれをせさせさまいざりれるとをたまふるなんいとうーろやをき云々（源玉葛）廿二我は似たるいーもうーろやをーらーとおやめきての給ふ（同東や）十二おゝにーぶくかる御ゐもひあらば外ざまはもおぞーありあんこれたゞうーろやをき事をとり申ありと（同帚木）十二うーろやをくのどけき所だはつよくいうむべの情ハおのづらもてつけつべきゐをざをや（同東や）十いらでうーろやをくも

ゑ給へおゝんとあけくれゝゝおもひ給ふるを（清慎公集）「うつろへるいろよ
あらふときくの花うゝろやそくもあらぎもあるゝゝ（源よもぎふ）十九 およびもぬき
過ゲてよとまらせ給へるをいゝゞ聞えさせんうゝろやそくそといへば 補（拾）雑賀元輔
「千とせへん君ゝいまさばそべらぎのあめのゝさこそうゝろやぬけれ（源藤のう
らゝ）十七 うゝろやそゝるべうときこえ給へば（同わかな）上、五十八 いとをさかゞよものゝ
給めるをうゝろやそくそゝへかゝゝ給へかゝゝとゆるゝきこえ給ふ（落くぼ）一 又さの
もゝげなくともうゝろやそくのさまふらんと書てやりつ

うゝろで（仲文集）「かまへつゝさてもありつる世をそむくうゝろでともよ思ひや
らるゝ 返し「そむきぬるうゝろでよりも極樂よむのむん君ゞ顔をこそ思へ（古事
記）中、五十五 宇斯呂傳（源うす雲）六 かゝらつきうゝろでおど（同玉かつら）廿二 うつくゝ
げなるうゝろでの（同紅葉賀）廿七 かうふりおど打ゆゞめてむゝらんうゝろでおもふ
よいとをこなるべゝと云々（空穂藏ひらき）下、四十六 母ゝやの御このたへおむをる御うゝ
ろでをゞたつきたとへんゝたおゝ（同）中、四十八 うゝろむき給へるゝぐゝの云々 此ゝう
ゝろでのひろでりゝゝるよゝつきてこそい 云々（源わけまき）四十九 うゝろでハゝら
ぎ顔よひゝひゞゝをひきゝはつゝ色どりたるかはづくりをよくゝて（同手習）廿五 姫

ぎみのたち出たまへりつるうゝろでをゝ給へりけるおめりとおもひて

うゝろめゝ（素性集）六「いもものうへに苔のころもぞうゝろめゝ戀の涙ゝもらぎも
ありおん（兼盛集）廿八「からくゝていそぎかりつる山田のおいおおゐせぞりのうゝ
ろめたさよ 補（拾遺）雑春、よみ人しらす「うゝろめゝさいゝでかへらん山さくらあらぬよゐひ
を風よまゝりせて（源兼澄集）「このさゐよりもりゝ玉水手もたゆくいもひゝ袖のうゝ
ろめたおさ（赤染集）「ぬきかへる道のさよりようゝろめた濱のまさごのかぎやゝ
りよゝ（同）「うゝろめた風ふゝぎともうづゝ火のあたりのもおゝちりやまさらん
（玉葉）戀一 輔親「うゝろめた風のさきおるもゞりぶねいづれのゝたよよらんとぞらん
（和泉式部集）「うゝろめゝさわゞゝめゝのゝをゝなへゝ花見る人よ心うつるな（万
代）雑六 道命「とゝもかくもわが身ひとつゝおゝつべゝのこらむ名こそうゝろめたけれ
（源とゝっね）十五 さゞかぎりあるみちの別のゝこそうゝろめたけれ

うゝろめたなう（兼輔集）十九「出たてばうゝろめゝさおくあるひとよめぐりよをゐて
みるよゝもゞかな 補（狹）一下 うゝろめたおうも侍らめ

うゝろめゝさなく（狹）四、中十三 よべゝいゝさくふけ侍りゐゝをあらくゝゝき風のゝゝゝきに
かけても道のほどうゝろめたおく思ひやり聞えさせ給ひゝよ 補（北邊隨筆）四、十四 說

あり

うーろめたかき（空穂國ゆっり）中七十九 よの中よかからん事あんいとうーろめさなきこゝち（堀太）春雨國信「ふりかゝる雲よむなやさぐふらんうーろめたなきよたの雨かな（狭）四十廿一 つひよいかなるべきよのとおぞそもーづ心かくうーろめさかきまよ

補（和泉式部集）「よのそどもうーろめさかき花の上をおもひがそよてあらーつるこのか（弁乳母集）「いそのこのをふるのやーろをとするればうーろめたなき三輪の山りな

うーろめさう（源空蟬）十小君がふーたるそれこー給へばうーろめたう思ひつゝねければふとおどろきぬ（同桐つぼ）十三 みー奉らでーでーもあらんがいとうーろめさう思ひ聞え給ひて（同あ合）廿三 今よりのちのさかえい猶命うーろめさー（同浮舟）四十三 うーろめさの御心のほどやとのゝ御有さまよまさり給ふ人いたれこいあらん

うーろめさく。ウシロ安シノウラナリ安心セヌ意（空穂國ゆっり）中七十四 よろづの事うーろやそくをあどの給ひてさち給ひぬ宮心さりともわれらがさめさうーろめさくものー給いんやいとおもそそ（源夕きり）四十五 そのこのそどもかければ奥よ人やあらんとうーろめたくて（中務集）廿九「わげこふるかそどらでも身よそひてうーろめさくもゝ

らそかるらか（古）秋上（兼覽）三（六帖）上「をそかへーうーろめたくもそゆるらかあ男山にしたてりとおもへば六れたるやどよひとりさてれば（後）戀二 ことめのふそを女のみんといひけるよ見せざりければ恨それるに其文のうらよ書つけて遣ーはる「これいかくうらそどころもかきものをうーろめたくいおもいさらかん（源うす雲）廿四 上いい夢のやうにいみどきことをきこーめーて色々よおぞーみだれさせ給ふ故院の御ためもうーろめさくおとゞのかくたゞ人よて世よつらへ給ふも哀れよらたドはなりはることとらたゞーおぞーかやみて（伊勢物）卅七 むかー男色好そかる女よあへりけりうーろめたくや思ひけん（元真集）十四（續後拾）秋上元眞「あらーふくそ山のさとの女郎花うーろめさくもかへるけふかかん（空穂國ゆっり）下ノ廿三。「大宮の御湯ドノ、ヨチ内侍ノスケ詞 おぞろげからでかかーくー給へばいらよ日比いい御湯殿をうーろめたくおぞそらん補（新後拾）雜下周防内侍「霜ゲ（カシロメダク）れの荻のういもの袖のつゆうーろめたくや思ひおきはん（眞名伊勢物語）ニ後目痛ト作リ○鈴屋翁云此詞後目痛ニテウシロヤスキノ反也俗ニ氣ヅカヒナルト云フ意也（後拾）秋上則長「をそなへーおそらる野べよけふーもあれうーろめたくもおもひやるかか（忠見集）「藤の花さくをみそてゝ行春いろいろめたくや思いざるらん

うーろめさ夕（源わか紫）廿五 うーろめさげよ思へりー人もいかならん

うーろめたさ（元）十七「くれてゆくうーろめさを山ざくら風の音さへあらく聞ゆる（空穂國ゆつり）下ノ廿七よべい道のそぞうーろめたさにみむかへは參りきさりーの

ぞ補（行宗集）「かはのめのむかるゝさびはいとゞーく君ゲまゝろのうーろめたさよ（續千）春下長家「立のへりいざまたゆらん山ざくら花のはそひのうーろめたさは

うーろめさき（枕）六二。后ノさてゐさり出させ給ひぬれやゲて御屏風はそひつきてのぞくをあーのめりうーろめたきわざと聞えでつ人々もいとをかー（源まつ風）八、入道かたゞーにつれて明石ヲえさるまゞきよーをいひつゝさゝゲは道のそどもいとうーろめさきけーきおり（同ををつくし）十五。源アカシヘノ文心のあくゲるゝまでなん猶ゥくていえゝそぐまゞきをおもひたち給ひねさりともうーろめたき事いよもとりい給へり（同夕かゝ）十。イヨノ介ヲものまめやゥなるおとかをかくおもふもげはそおゲまーうーろめさきわざなりや（狹）三、下十三。源氏宮ヘ大將ノ心カケタルヲイトコ故云々覺をいうーろめたき御せうとの心ゞへおりかー（同）一、五夜などおのづから打まぎれ給ふよおゝ二所ながらうちもふさせ給いぞうーろめさき事をおゞきあかさせ給へと（六帖）五、上「おもひやる心い君をそてこおんーらぬ使いうーろめさきを（源澪くも）廿四今までーのびこめられたりけるをおんゥへりてうーろめたき心おりとおもひぬる（拾）

春、元長親王延光「朝まだきおきてぞそつる梅のもおよのまのかぜのうーろめさは（同）秋「もそぢをを手でとはをりてこのへりおん風の心もうーろめたきに（夫）廿一俊頼「いさやまたふそもみられぞとゐをれゞとざえのもーのうーろめさは（源末つむ）六たちぎゝせさせよとの給へど心はくゝてと思へゞいでやいとゥすゥなる有さまは思ひきえて心くるーゞはものー給ふめるをうーろめたきさまはやといへゞ補（落くを）一かぐうーろめたきことい侍りおんや

うーろめさー（狹）一ノ廿五いとあやふくうーろめさーとそやり給へり（大和物）二「花ざかりをぎもやをるとかむづなくるでの山吹うーろめさーも

うーろそ後見（源東や）十三當時のそゥどーゥめぐそ申給ふおれゞ御うーろそい心もとおのるべー（同末つむ）十五ゥぎりおき人も親のあつゥひうーろそ聞え給ふをぞおそわのび給ふもことをりおれ（同帚木）廿さをゲは我そをてゝん後をおもひやりうーろみたりー（同）十七ものまめやかはうーろそ（同とっ音）十三御衣とものの事うーろみ聞ゆる人い侍るや（同帚木）十うーろそのゥたいものゝあいれおりをぐー（同）十七とはかくはつけてものまめやゥはうーろそ（同すま）卅一げは葎よりそゥのうーろそもなきさまにておいをらんとおゞーやりて（同桐つぼ）三とりたてゝむのゞーき

御うーろみあけれバ（同同）廿三たゞ人まておはやゐの御うーろゝをそるなん行さき夫をさしていふもゝのもーげなる事とおゞーさゞめて（同宗木）四十六ふつゞゝかるうーろゝまうけて（同わか紫）十九このこのうーろゝかるべーー（同をとめ）卅九けさうゞそふとてさゝぎつるうーろゝぞも近うよりて五節の介錯（同まほろし）七むゝのゝ給ひーかバとて ノ人ヲ云

たいの御まへの紅梅とりわきてうーろゝありき給ふをいと哀と見奉り給ふ

うーろゝる（落くゞ）四かくこまのにうーろみるゝあれれかる事をそ補（宇治拾）五

うーろゝめーいゞゝ

うーろーたる（源蜻蛉）五十三かたへゝ几帳のあるまゝをべり隠れあるゝ打そむきおーあけたる戸の方まに紛らゝーつゝゝかゝる云々カチル哥云々只此さうーまうーろーたる人まに見せ給へバ身ゞろきかゞもせゞのどかまいととく哥云々

補うーむく（万）五神つまりうーもきいまそ（同）十七、卅九そめ神のうーむきいまにまひかものそのたちやまま（同）九ノ卅三此山を牛掃神之

うーゞ（夫）廿五、衣笠内大臣「いせのあまのねるやうーゞのいくかへりーのらきおもひまに身をおゞそらん補（後）雑二、よみ人しらす「ーらかゝのうちさわがれて立ーかバ身をうーゞまぞ袖ゝぬれまー

補うーゞのおと（夫）卅六爲家「たのむぞようーゞの聲をきくゆめのもとのちかひまおもひあもせて○觀潮音といふ事まて佛書の趣かり

うーかひ　牛飼（源東や）五十八かゞーらぬうーかひ

うーなふ　失ふ（伊勢物）百九段むかー男友ざちのひとそうーかへるゞもとまやりける（源みのり）五佛のおいそる所の有さまも遠からぞ思ひやられてまとかるふかき心もかさ人も罪うーかふべーー（同朝かは）十七とーーろーづゝつる罪うーかふぞこのり御行ひをとゝおゞーたてど（同よもきゝ）十一もかなき御てうどゝもかゞもとりうーかゝせ給ゝぞ（古事記）上ノ五十其鈎失海補（万）十五、卅四「ーろたへのあゞーたぞろも宇思奈波受もてれまがせこさゞまあふまでま

うーん　有心（枕）二ノ廿四とくいへあまり有心すぎてーそこかふなとの給ふま（榮根合）廿九おとなびてうーんまものーー給ふ人まてえつかうまつらゞと申給ふされぞよそかがらもさそれ〳〵とてかさせ給へるかりはり。

うーんゞや　文丸云有心者也（空穂菊の宴）下、六十四。北方の住かの所いかゞみ給ふ心もかくゞゝえぞなん中將苔更まもの給ふかなうーんゞやなりかたらひおきてときゞーー紅葉みる所まーー給へ（同初秋）下、八十七。仲忠ノ母ヲこれ有心のぞうにてもんたうかされの

人なり心ーてものせさせ給へとの給ふ(同國ゆつり)下、卅八この仁壽殿の腹のそこた
ちをそよやうーんおもそあれと女みこの打つれたるまこそいあめれ

うーのくるま 牛車(拾)哀傷、よを人しらす「よの中まうーのくるまのおかりせばおもひの家
をいかでいでまー

うーのくひ 丑の杭(禁秘抄)上、廿上古隨陰寮漏刻奏之近代指針藏人仰之丑杭以後爲明
日分(弁内侍日記)上夜いふけぬるこのうーのくひのそどりとゝもせ給ふを(夫)十九信實
「うーのくひさをがま月のかゞいでゝ心すむよの時の札かな

うーのまへ(うつそくち開)中、四云々とのたまふほどまうーのまへと申せば夜ふけま
れり

うーおま 牛鬼(枕)八、二名おそろーきもの、うーおま

補 うーおふもの 牛追物(著聞)九、三(東鑑)二モ

うーころも 牛衣(今昔)牛衣のおとくなる布衣を着破れさるむーろを腰まひきかけ

補 うーそつ (大和物)時まうすおとのーれれば きくにうーみつと申けるをきゝて
云々(拾)連歌 人おゝろうーそつ今いたのまどよ

うーよつ (狹)四、下 えんーろうの中と
ひとりこたれつゝうーよつと申までま成まけり

うゑ 飢(万)五、廿九 まづーき人の父母い飢さむからん(推古紀)十九 飢者臥道垂云々 伊比
爾惠豆(小大君集)「くひどころそれば うねゐる老おすび飢たるひとのくへるおる
べー

補 うゑたけ (万)十四、廿二「うゑさけのもとさへとよそいでゝいなばいづーむきてこの妹
ゞおぎかん

うゑき 植木(榮月の宴)十六。高明流罪ノさま〻ーさばかりうゑあつめつくろいせ給
ひーせんさいうゑ木どもゝこゝろにまかせておひあがり云々(後)雜三「風ーもにい
ろも心もかもちらねばあるまは似たるうゑきおりけり(万)二十、五十九「うちおびくもる
ともーるくうぐひそいうゑ木のこまをおきわさらおん(源をとめ)五十三紅葉のい
ろこかるべきうゑ木どもをうゑ

補 (万)ひんがーの市のうゑ木(同)十九、廿五わがやどの
うゑ木橘花まちる時そまたーそ(待賢門院堀川)うゑ木のかげ秋まに似たり

うゑめ 植女(夫)七、西行「ほとゝぎを聲まうゑめのいやされて山田のさなへたゆまで
ぞとる(同)家隆「さおへとるみたのうゑめもいろ〻のそでをつらねていもふけ
ふかお

うゑーうゑべ (和泉式部集)下「うゑーうゑべかゝれとぞかーさくらばおそにとて

こそゝ人のきつらめ 補（古）秋下 人のせんさいは菊にむをびてうゑれる哥 在原業平朝臣「うゑーうゑゞ秋おきときやさゝざらん花こそちらめねさへゝれめや○信友云（古）秋下 人の家なりける菊のむおそうつーうゑたりけるをよめる 貫之「秋をおきて時こそありけれ菊の花うつらふゝらに色のまされゞ此詞書ノ言ノコトク本ハうつーうゑゝナリケルヲうへート書訛りさるおらん（順集）「うつーうゑゝつゝのまもおくゝるこのやゝそちよの數をかぞふむかりぞトヨメル哥モアリトオモヒツルニ兼輔卿ノ眞筆ナリトイヘル古今ニうゑーうゑゞトアレハ此考トホリガタシ（和泉式部集）ゑ權中納言の屏風の歌櫻咲たる家ゑまろうどおほかり「うへーうへいかゝれとぞこの櫻花みゑとて春ゝ人のきつれゞ○コノウヘモウヘナルベキカ上ナルハうつーカナホ考ベシ

うゑびと 飢人（拾）哀云々 飢さる人道のゑとりにふせり云々 紫の御ぞをぬぎてうゑ人のうへゑおほひ給ふ

うひ（古）物名さう ひ貫之「われゝけさうひゑぞそつるむなのいろをあざなるものといふべゝりゐり

補 うひたか（貫之集）藤原兼輔中將の宰相よかれるよろこびよいゝれるようひむおさける紅梅を折てことーおんさきむゞめたるといひさるよ

うひゝうふり（伊勢物）初段むゝー男うひゝうふりーて○元服の事おり初て冠きたるをいふ

うひたち（曾丹集）夏十首の中「ゑとゝぎそうひたつ山をさとーらゞこのまをぬきてきくべきものを（空穗祭の使）三、アテ宮歌「夏ゞゝりうひたちをゑるゑとゝぎをすゑゝかへらぬとーもあらゞお（夫）二仲正「いつーかもうひたちゑけるかをそかなまざいとけおきたるのむゞめに（惠慶集）（夫）二「山里の人のみおかれけさみれゞうをくかをそこの峯にうひたつ（源あふひ）廿三 内おどゑもあまりひさーうまるり侍らねゞいふせきゑけふおんうひたちー侍るを

うひ〜〜ー く（十訓抄）二ノとー頃籠居の間公事忘却候てうひ〜〜ーくおゞーめさるゝ條尤道理也（夫）卅六信實「たないーゑかつゞーこまをうおがーてうひ〜〜ーくもいづるたびかお（源末つむ）十六 人にもの聞えんやうもーらぬをとて奥ざまへるざり入給ふさまいとうひ〜〜ーげなり（同玉葛）卅八 昔光源氏おどいふ名ゝ聞ゑさり奉りーゝゞゝーころのうひ〜〜ーさも思ひ聞えさりれる。年ノワカサニ（同松風）十四 かのゝいある所ゑ二條ノ院ナリうつゝひ給へとのさまへど明石也 いとうひ〜〜ーきゝどをぐーてと

（同竹川）七年のかぎそふまゝよ内まゐりよりやかのありきおどうひ〳〵くおりよて侍れば（枕）十一、またうひ〳〵きやどなる今参りどもいとつゝまゝなるよ（源やとり木）十六明むなるゝまゝに霧のたちそちたる空をかゝきよ女どちハゝどれおくあさいゝ給へらんゝゝうゝつまぎおどうちたゝきおそづくらんおそうひうひゝかるべけれ（同東や）十一遥おる所よりうちつゞきてそぐゝ侍り年頃のやどにうひうひゝく覺え侍りておん参りもつかうまつらぬを邊土ニ居テ世ノ中ノ「初心（同同）卅一いとうひうひゝうおらひよて侍る身ゝ何事もをおがまゝきまでおん注戀路ノ方ニハ練習セザルト也（同夕きり）六齢つもらぎからかなりゝほどよやのをきさるこのたよおもれおまゝかばうううひ〳〵ゝうも覺えざらまゝ（同をとめ）十七宮にそゝのかゝ聞え給へばちうさもおとうひ〳〵ゝうおりよけりやとの給へぎおもゝろうひき給ふ（同夕きり）五十五更ゲへりてゝさうだち涙をつゞゝかゝづらゝんもいとうひ〳〵ゝうるべゝ（同わかあ）上卅今ハさやうの事もうひ〳〵ゝうをさまぢくおもひなりよされば（同玉葛）十一此和歌ゝつこのうまつりたりとなん思ひ給ふると打ゑをさるも世づこのぎうひうひゝや（同）卅九親子の中のこのく年へさるさぐひあらぢものをちぎりつらくも有けるゝおお今ゝものうひ〳〵ゝくわゝび給ふべき御ほどよもあらぢを（同せきや）五今ゝまゝていとものづこのしうよろづの事うひ〳〵ゝき心ちそれどめづらゝきよやえゝのばれざりけん（同同）五とゝ頃のとさえもうひ〳〵ゝうなりにけれど心にゝいつとなくたゞ今のおゝちするおらひよおん（同東や）六十。薫ノ浮舟ノモトヘ初テ來リ給フ所さちおがらやゝゝへゝ奉り給ゝんかの殿よおそかくおんとゝのびて聞えめちかきほどおればといふうひ〳〵ゝくおどてゝさゝあらんわかき御どちもの聞え給ゝんゝふとゝもおそつくべくもあらぬを補（源とこ夏）廿かぐてものゝ給ゝつきおくうひ〳〵ゝくなどやある（和泉物）かゝるありきのつねようひ〳〵ゝくおぼゆるそ（狹）四下御せうそくあればいとうひ〳〵ゝくつゝまゝれれど頓ておもゝます所ちこのきやどおれば（源行幸）九よろづうひ〳〵ゝうよざれくおりよて侍り（同椎かもと）卅いかようひ〳〵ゝうふるめきたらんおどおもひくつゝ給へり

うひでと　初事（源帚木）四十一そのきゝ〳〵をまざおもひゝらぬうひでとぞや

うひこと　初琴（源やとり木）七十五このたなりおるうひでとをもかくさぎおそあれ（同とつね）七いもけおきうひ琴ならふ人もあめるを

うもれ（狹）一下七、あまりうもれ給へるゝゝきなどいこのく花々ゝくとりておされ給へる御有さまよゝたがひて行末やいかゞとおされ給ゝんと心ぐるゝこのりける（源や

たる)四宰相のきゝをぞも人の御いらへ聞えんまとも覺えぞもづかしくてゐるゝ
うもれたりとひきつゝ給へば(同よこ笛)十二あなうもれやこよひの月をゝぬ人も有
けり(同さかき)十六とゞ殿のうもれたりつるまもなくうゐりて補(芳雲集)實陰公
「松いけさ雪ようもれてをみがまのねふりぞかりぞみねまのあれる(榮月の宴)よ
ろづにおぞーうもれたれば云々(拾玉)五「きのふきゝー枯野の風ぞ身まーめてね
ふの心い雪ようもれぬ

○補うもゝる(拾玉)四「ーらかーのおつる木のもーそれつゝ夏もうもるゝ山路
をぞゆく(同)六「あもれまもかよふ人おき山邊かお苔ようもるゝ岩のかけみち(同)
四「夏の山もゝぢせぬ木のこのも落てーをるゝ色ま道うもれねり

うもれいゝさき(源さかき)三いとあまりうもれいゝさきを(狹)二、上、下、けぢーのきほどま
て見奉りつるとをこのりい御耳ま聞えーらせざらんもあまりうもれいたきこゝちー
て補(源ゆきふ)廿五心をへおどもたうもれいゝさきまでよくおもをる御ありさまま
(同かしい木)卅四つねまひき給ーびも和琴おぞの緒もとりもおちやつされてねをゝ
てぬもいとうもれいたきこざおりや

うもれいたー(イタシハ甚也)沈鬱ノ心契同(源あかし)廿五若き人のめでざらんもいとあまりうもれ

いたらん(同すま)廿四いとうもれいゝさくいらでとー月をぞさまーとおぼーやら
る(拾)雜戀家持「久かゝの雨のふるひをたゞひとり山べまをれだうもれたりねり○此
哥万葉第四ニアリテ鬱有來(イブセカリケリ)トアルヲウモレト改メテ入ラレタレバ沈鬱ノ心ナルベ
シイタクハ甚キナリ

補うもれぐさ(夫)(信實集)「大あらきのもとあらの下のうもれ草さもおいらくの
末ぞいぶせき

補うもれまつ(隆信集)「二葉より引人もおきうもれ松ひとりもとーれふりにける
かお

うもれぎ(清慎公集)「山おろーの風いふけぞもそのもーも今いちりこぬ谷のうも
れぎ(古)序うもれ木の人ーれぬことゝおりて(新勅)雜二(和泉式部家集)下「もるや
くるもおやさくともーらざりき谷のそこなるうもれぎの身い

うもれみづ(能宣集)七「うもれこのうへいつれおく有おがらーたまいふかきこひも
をるかな

うもれみづ埋水(千載)戀一右大臣「人ーれぬこのもの下の埋水おもふ心をのきおがさ
ぞや補(新古)神祇俊成「春日野のおどろの道のうもれみづ末たま神のーるーあらいせ

（續後拾）戀一宗泰「かぜならぬみやまがくれのうもれみづうきにいえこそもらさざりけれ

うもれすくより（源末つむ）廿四いとうもれをくよかゐて何のもえなきをぞ口そーうおがを

うせぬ 失（枕）三冊。タトシベナキモノ、所同ド人おがらも心ざーうせぬるいまゝとゝあらぬ人とぞおがゆるかー（同）三ノ冊一。供ノ主人長居ナッかのいふものいとかくも覺えぎ此ルヲ人々ノ心ゐたる人おそをかーう見聞つる事もうそるやうゝ覺ゆれ（源帚木）十八かゝる心だにうせおがいと哀とおもふべき（賴政集）上「とーでとゝ哀とぞおもふさくら花そるべきそるの數もうそれば（和泉式部集）上「きそしふる心ハちゞにくだくれと一つもうせぬものゝぞ有れる 補（万）十二、十八「久りさの天つみそらゝ照月のうせなむ日こそ我こひやまめ（宇治拾）一ノ廿七もーりさきだちてうせぬ

うも 髻華（景行紀）云々志邏伽之餓延陽于受珥左勢許能固（古事記）コモ（推古紀）十一年云々唯元日著髻華髻華此云于孺

うも 死（源蓬生）七齋院うせ云々まひおどーて（土佐日記）京ゝて生れーー女子云々うせゝーりば（源帚木）廿二此人うせてのちいかぐいせん（同玉葛）七俄にうせぬれば（狹）

四、下四十三常磐の尼君いうせゝーぞのーー云々うせて四十九日云々おくおりにー有さまおどきおえさするついでわ

うも 失（源帚木）廿二かきけちてうせゝーーの（同玉葛）十六いづちもーーまかりうせおんゝとゞあるゝゝど（同夕かは）廿九おものゝゝゝとゝえてふときえうせぬ

うもいろ（源夕かゞ）二十一ーろきあいせうもいろのなよゝろおるをかさねてもなやかならぬもがた（細）紫のうもきいろなり

補 うもそおぞめ 薄花染（新千）戀一宗尊親王「せきかねー涙のもてや紅のうも花ぞめのいろゝいづらん（同）同定爲「あさもかゝうつりゝゝりおくれなゐのうも花ぞめのころもへぎーて

補 うもわらふ（宇治拾）十五九そのとき門部府生うすわらひておゝがーらげまへゝいうれて（好忠集）「わきもてゞ衣うもれてゝえーよりゝいれねせーとおもひそめてき（夫）冊六、和泉式部「れふよりい蘆まのみづやぬるゆいらんたつのたちどの氷うもれつ

戰（好忠集）十一月終「けを寒ゝさえ行冬のよもうもがらめざゝもあもぎ衣うもれて

うもつく 春（三体詩）上隔溪遥見夕陽春（淮南子）曰經于隅泉是謂高春起于連名是謂下春 補（白氏文集）尋郭道士不遇藥爐有火丹應伏雲碓無人水自春

うそら（清慎公集）「そつ雪のうそらにふれる庭のおもいふみゝんあともあたらしきかな

うそらか（枕）八ノ十一 露のいと高くゝあらぞうそらかゝふりたるおどいいとこそをこのしけれ（源ゐふひ）廿二 よび色のさゝぬきうそらかに衣かへして 補（宇治拾）一ノ廿一 うそらかあるかたなのおがやかなるゆたるゲ

うそらぐ（堀次）舊年立春 「あづまやの軒のたるひのうそらぐゝ雪かきわけて春やたつらん（夫）冊一 增 （好忠集）三月上 「あさおゝ庭くさとるとせゝそゞゝ妹がゝきねいうそらぎゝけり（源さかき）十六 えかどのわさり所おくさちこそさりゝ馬車うそらぎてさふらひゝとのるものゝ袋をさゝ〳〵をえぞ（同同）四十三 まゐり給ふも今いつゝまゝさうそらぎて御みづから聞え給ふをりも有けり（同のわき）七 今も大かたの覺えのうそらぎ給ふ事ゝおれれと（同かしい水）冊八 かへりていあざやかなるかさの覺えうすらぐものなりと云々

補 うそらだろも（好忠百首）夏十一 蟬の羽のうゝら衣ゝおり行ゝなど打とけぬ山ゐとゝぎに

うそらひ（万）廿五十四 「さゐ川にゝほりわたれるうそらひのうそき心を我おもいおく

ゝ（好忠集）とるの「かゆのゐる入江の氷うそらぎてそこのえくづもあらいれゐれゆくり 補（齋宮女御集）「うそらひゝとぢたる冬のうぐひそいおとおふもるの風をゐそまて

うそむらさき（和泉式部集）下「かいらゞといかゞさのまん今いおそうそむらさきのいろときく〳〵

うそうた 白歌（後拾）夏、元慶法師 「我やどのうきねを過そほとゝぎにいづれのさともおなゞうのもを（袋草子）元慶つくゝゝて此うたを詠ゝ上洛の時於山崎邊下女の白歌ゝ唱之元慶聞之拭涙云々

補 うそくあき（元輔集）「春霞さちをゝよりそうそくこきゝゝきと見ゆる山のさくらゝ（興風集）「うそくこきいろいまがへと花といへゞひとつかそゝも見えわゝるかな

うそやう（源おかし）廿五 いといさうおよびさるうそやうにいとうつくゝゝゞにかき給へり（同うき舟）五 こゞりのうそやうおるつゝこぶみの 補 薄樣帖紙（園大暦）ゝ徳大寺前内大臣より公賢大臣にくさ〳〵の事ゞも問給へる條々の中ゝ一帖紙ゝ不及沙汰之由蒙仰候ひゝ只朝夕用候白ゝ候やらん若薄おどちと散ゐそたるものゝや候べ

き現在鼻垂候ハヾ可被出之間可有之様大切候歟公卿以後も薄様帖紙持たる事もよそよハ見及候〻是ハ若夏の事候やらん紅の帖紙古物をゞ持て候とあり帖紙ハ今の世ふところよりもつもな紙おり(重之集)あらのうゝやうよせそのもぬけをつゝそて

補 うゝそれふり(夫)後京極「朝日さしこゝろりの上のうすゝふりまだ晴やらぬよゝの川きゝ

うゝそあゝり 薄氷(千載)冬 公實「きのふまそ秋ハくれ〻このいつのまよ岩まの水のうゝそあゝるらん 補(壬二)中「ささらぎやさえつる風のよのまよもまゞ薄こゝる池のおもかな

うゝぎさくら(袖中抄)四 都のてぶりの所ニ六條修理太夫哥よ(夫) 四「霞たつ鞍馬の山のうゝぎさくらてぶりをゝておをりぞわづらふ○おれハくらまの山のうゝぎさくらとつゞくるハかざり馬の唐鞍の雲珠(カス)よそへたり供奉の人のてぶりを馬副のてぶりよよせられたりそれも花そて手おゞ打ふりてありく心歟(夫)四 仲正「ゝらくらやこまもゝざらぬふるさとの庭もせよさくうゝぎさくらかお(同)同 定頼「これやこの音よきゝつるうゝぎさくらくらまの山よされるおるべゝ

うゝそきり 薄霧(千載)秋上 伊家「秋山のふもとをおむるうゝそきりハそ野の萩のまゞきおりけり

うゝそきぬ(源うつ蟬)十九 ゝのぬきそべゝさるうゝそぎぬをとりていで給ひぬ

うゝそきこゝろ(源紅葉賀)廿八「ゝくれおきものとゝる〳〵夏でろもきさるをうゝそきおゝろとぞそる

補 うゝそゆき 薄雪(玉葉)冬 爲兼「さゆる日の時雨の後の夕山にうゝそゆきふりて雲ぞそれゆく(風雅)冬 雅孝「降けるも眞砂のうへハそわかで落葉よゝろき庭のうゝそゆき(同)同 朝定「さゝの葉の上そのりよハふりおけど道もかくれぬ野べのうゝそゆき(同)同院冷泉「跡たえてうづまぬゝもぞそさまゞき芝生うへの野べのうゝそ雪(夫)十八 定家卿「一とせをなげめつくせる朝戸出ようにゆきこゝるさびゝさのたて

うすゝ 薄(古)雜下 是則「さゝやまのそゝその色ハうゝそけれど秋ハふゝくもおりよけるゝな

うゝそもの(源横ふえ)五 ○カチルイト白きうゝそもの(同うつ蟬)四 ○ケナキ時ゝろきうゝそものゝひとへゞさね(源さかき)五 うゝそものゝ直衣ひとへをき給へるよゝきたまへるもゞつき云々 補(拾)雜秋 云々扇よもられて侍けるうゝそものよおりつれて侍ける

うすゞまり 俗ニウヅクマルト云詞也(古事記)庭そゞめうゝそゞまりゐて

うそゝき　イソガシク立走リタルサマ也（源朝かは）十二ころどもりさむげなるはたひうそゝき出きてとゝまもえあけやらぬ○眞淵云古事記ニ立走伊須々岐といひ大殿祭詞ニ夜女能伊須々岐などとり出たる詞歟然らばいとさむきに身もそゝろぎて來るさまならん

うそゞみ　薄墨（源あふひ）「かきりあれば衣うそゞみなれぬるかな」（同みのり）廿うすゞみとの給ひしよりい今すこしこまやかにて奉れり

○爲の部

ゐ　井（神代紀）上ノ廿五乃堀天眞名井三處　補（年々隨筆）二、云ゐといふい田にまかれ料の水の事也云々此書の説可考

ゐ　猪（拾）物名すげみ「いかりゐの石をくゝみてかゝしこいきさの牙にこそおとらざりれ」

ゐ　居（順集）「ゐてもこひふしてもこふるこのひもおくかげあさましくゝえぬ山の井」（源紅葉賀）卅一七月にぞ后ゐ給ふめりし（注）中宮に立給ふ　補（散木）とりかひといへる所にて船のゐてくだらざりけるに

ゐ　即帝位（狹）四、下、四親をゝゞ人にて御帝にゐ給いん事いあるまゝき事也（同）四、五御門の御夢にゐ殿大將（古）の御夢にもとくかたりゐさせ給たまへばあしかりなんとのみ打しきり御覽をれば

ゐ　塵、雲、水草、墨、鳥闕露ナドニイヘリ（枕）八廿二池などのある所い水草ゐ庭おども糸蓬ゐ多りおどこそせねども（同）九廿九女い鏡硯こそ心のゐどみゐるなめれおき口のもざめに塵ゐおど打そてたるさまよおしゝ（同）黑箱のふたもゝたしおちたる硯わづかに墨のゐさる

補　ゐぞ（夫）廿三、江五月雨「さみだれにゐぞのうもてのゐ水越ていり江のゐとりいまりたつらん」

ゐどころ　居所（狹）二、上廿七をこしたおれさる所の紙さうゝおどゐりにてあらしゝきかりそめの居所と見えたり

ゐぬれば（宇治拾）四、七寺の板敷にのゐりて此女ゐぬれば此蛇ものゐりてゐたいらにわざのまりふしたれど（同）腰よりゐえい人にてしもいくちなはおる女きよげおるゐゐていふやう（同）うれしとおもひゐるしゐば（同）五、十四うつぶしたるやうにてゐられたり（源はたる）七ゐ給ひもあゐさを云々ぬれしゝ夜ふゐくいで給ひぬ

ゐる（源わかな）下、七十八「ちぎりおかん此よおらでもたちゐば玉ゐる露の心へたつゐ（千載）夏道綱「夕されば玉ゐるかぜもみえねどもせきの小河の音ぞゐゝき（源

まほろし）十六「さもあそいよるべの水よみくさゐめはふのかざーよなさへわすゝ（小大君集）廿四詞ひさーうありて來りいる道にちり有と女いへば「我おらぬ人もおきふは所よいちりのこゐるといふぞあやしーきゝへし「ちりならで又ゐる人もおきものそことよおき名もさつぞわびーき（人丸）十（万）十一（拾）三懇「青柳のかつらき山よゐる雲のさちてもゐても君をあそおもへ（家持）十九（六帖）（新勅）雜三「こよーのれこふねの山よゐるくもの常おらんとも我おもいおくよ（兼盛集）十八「みさでゐるあらいそよたつ浪おれば平らはくこそ我國いあれ（奥義抄）四「神さびのよるべまた雨水のこくさゐるまでいもをこぬゝも（住吉社歌合）清輔「月かゞいさえよけらーお神がきやよるべの水よつらゝゐるまて（千載）冬親宗「いづくよゝ月い光をどむらんやどりー水も氷ゐよゝり（同）冬、崇徳院「つらゝゐてみがけるこのげのこゆるこのおまことよいまや玉川の水（白文）二ノ十五此鳥所止家（源ほろし）十四「このりゞゐー苗代水のたえーよりうつりーもおのゞけをだにみぞ補（續拾）秋下、後堀河院民部卿典侍「清見ゞた月の空よい關もゐぞいたづらよさつ秋の浦おこ（續千）旅爲相「故郷のゆめのゝよひぢ關も居ば何を旅ねのなぐさめよせん（新後）戀一、澄覺法親王「こくさゐる板井のーこづいさづらよいもぬそくこてーる人いおー（散木）舟いゐれぞも波いたちけり（万）

四、五十五「早河之湍爾居鳥之よーをおこ思ひてありーこがこもあいれ○廣足按此ゐるいをるとよむりたよろーき歟（同卷）五十、云々山邊爾居者いぶせりりけり六

ゐさづらひ（蜻蛉日記）上そなさよも出ぞおぞあれば居わづらひて此文をりりをとりてかへりよけり

ゐわけて（枕）七十人のなぞ〳〵合せーける所よ云々其日よなりてこな方人の男女ゐさけて殿上人おとよき人々おほくゐおこてて

ゐりこり（六）四（源あけまき）七十九不斷經の曉方ゆゐかもりたるおゐのいとさふときよ

ゐかくれ（源こつ音）十四青にびの几丁心をへをりーきよいたくゐりくれて（空穗くら開）上、一十一。上のかあおさがおやあらこおりとて女御のきこよゐかくれ給へば（源こし姫）二うちおる人ひとりい柱よをこーゐかくれて

ゐりーおまる（源せきや）三おゝかーこの杉の下よ車どもかきおろー木がくれよゐかーこまりてをぐー奉る

ゐよる居寄る（源帚木）十六ちかくゐよれば君もめさまー給ふ（狹）三、下、四十七ちかくゐよらせ給ふはーき

ゐたち（源桐つぼ）廿六。御門ゐさち覺ーいとおそてこのぎりある事に事そそへさせ給ふ。元服ノ時ナリ（同わふひ）卅四いとしーもあらぬ御志を院おどゐたちの給ハせ（空穗國ゆつり）上ノ十六さる人の心ゐいれてゐたち給ひける事おれハ云々（同同）上ノ五十民部卿ハ娘ゐむことりーさらんやうゐゐさちて殿へもものー給ハで只此きその事をいそぎ給ふ（空穗嵯峨の院）八十八こゝらのさちいたがそも〳〵ゐたちてゐんうませ奉りー

補（源若菜）下、九十おそ孔おとゞゐたちていかめーくこまかに物のきよらぎーきをつくー給ひけり

ゐたまひ（枕）九、三もーどのゝもとゐる給ひて（源玉鬘）卅七物うゞーてもかおき山ざとゐかくれゐゐけるを

ゐたけ（空穗嵯峨院）七十二御ぐーハゐゐゐにていとけたかうきよら也。小兒也（同吹上）下ノ廿七ゐさけ三尺ばこのりのーろかねのおま犬（榮つぼみこお）十うさてあまりゆゆーき御髮ゐおとーもぎゐゐたけゐもおりぬべゐめりおど仰られて（源末つむ）廿四ゐたけのたかうそせおゐゐゐえ給ふ

ゐたけたゐ（榮根合）十八のさそゐものー給ハん人のゐさけざゐゐ

補ゐづゝ井筒（散木）泉をよめる「いーゐづゝ隙もる水ゐさむふれてつてゐも夏を聞わたるかお（同）「ひさぎおふる山かたゐげのいーゐづゝふみおらーてもそゞむころのお

補ゐつかぎ（宇治拾）三ノ廿三此つゐのかたハいらちかくハなどもえゐつかぎむつかーきことありといひつたへて大ゐさ人もえゐつかねゞ

ゐつきて（枕）十一、六更ゐおき給ハざりゐりといひゐいきさゐるゞやゞてゐつきてものいふなり

ゐねう園繞（枕）六、八。初瀬の所わかきをのこのをかーろ打さうぞきさる童おどーて具シテ也さふらひの者ともあまさかーこまりゐねうーゐるもをかー（狹）二百五十六釋迦佛のときたまひけん其庭ゐざゐわらひまぎらハーけん提婆さゞ外道などいふらんものだゐ今宵の御うへゐハ皆ゐねうそらんと覺ゆるゐ

補ゐねふり（著聞）御厩のそとりゐねふりトて候ゐるゞ

ゐおそり居直（源わかな）上ノ百三宮もゐおそり給ひて御物語ー給ふ（同かしは木）四十三御息所をこーゐざり出給ふゐもひそれゞやをらゐなそり給ひぬ

ゐおゐ田舍（源兼澄集）あるゐおかにまかりて京ゐのそりーゐ（源末つむ）十ゐおゐなといむつかーきものとおそーやるらめど（同夕かほ）六をとこいゐおゐゐまろり

て補（万）三ノ廿六「むかしこそ難波居中といそれけめ今い京引都備ゝけり春海云引ハ刀ノ誤（山家）下「うぐひはい田舎のさまのはなれどもぞそたるおもいならぬ也けり

○ゐなかわさらひ（伊勢物）廿三段ゐなかわたらひしはる人のこともの

○ゐなりわざ（源すま）四十五碁双六のぞんてうどきぐの具なぞ田舎わざまゝなーて

○補ゐなかたち（著聞）十七、廿二此ぬーいゐなかたちのものなれば

○ゐなかび（源わか紫）六いでやさいふとゐなかびさらん（同まつ風）三ゐなかびまれるまゝちも靜なるまゝきを補（源あつまや）五十八さうのものどものゐなかびさるめーいてゝ（同玉葛）十ゐ中びたることといびのがる（同）廿三ゐ中びさるひとをゞ（同）廿四いといさくこそゐなかびまれれな（同）四十一あさまーうゐなかびたりーも（同）四十二ゐなかびたることやと（うつを樓の上）上ノ今もゐなかびぎよーくーく冊八

○ゐなかびと田舎人（源わかし）廿八くちをーきゝいのゐなか人こそ補（同玉葛）廿八あなゐみゞやゐなか人まておもーまさまーよなぞ

○ゐなかもの田舎物（枕）八、二いやーゞなる物云々ゐなかものいやーきなり

○ゐなかせのい（更科日記）ゐなかせのいの人だにそるものを

ゐながら（白文）九、九光陰坐遲暮

ゐなこ（源わふひ）四十四かのゐなこうんゞたりつるはーきぞもぞ哀まおもひ出られ給ふ

ゐん院（源わかし）廿七こかどの御ゆめまゐんのこのぞおまへのこもーのもとにたゝせ給ひて（同ととめ）初院いみぐるーきことまおもゐーの給へど（同さかき）冊二ゐんもかくなべてならぬ御心ばへをきこえ給へれば（同わふひ）四十九かくてのちい内まゐ院にもあからさまま參り給へるゐぞざまーづ心なく

ゐん院。居宅也（伊勢物）八十二いまかりそるかさのゝかぎさの院のさくらあとまおもーろー

ゐんかさ院方（源藤のうらと）廿四あるゞの院めたも御心をつくーめもあやなるあころまうけをせさせたまふ

ゐんのうへ（源さかき）三院のうへおどろくーき御なやまにいあらで例ならぎとき〳〵なやまま給へば

ゐんふたぎ韻塞（枕）九、四ふたり顔なるもの、ゐんふさぎの時とく〳〵たる（源さかき）四十八ふたつくりゐんふたぎなどやうのをさびわざどもをーなど心をやりて（同うき舟）九ゐんふさぎをべきまま集どもえりいでゝこなさなるづーにつむべきあとな

どの給ハせて○或人云偏突韻ふたぎい學舍塾中の小人のあそび也主人不相識偶座爲林□莫謾愁沽酒囊中自有□（韻字チフサノ也）補（中務集）堀川中納言るんふたきの所よめ〜さりれるに「山々の〜げりをとれてなく鹿をいかでとも〜れ人たづぬらん（明衡往來）六月ノ消息ニ云々極熱之頃掩韻聚句可赴清冷之地也云々トミエタル掩韻コレナルベシ

るん〜（院司（拾芥抄）中末）院司、別當、執事、年預、判官代、殿上人、藏人、非藏人、主典代、廳官、召次所、仕所、別納所、御服所、御厨子所、進物所、文殿、所衆（藏人所也）武者所、御隨身所、將曹左右府生左右番長左右近衛、御厩、女院同之（但武者所隨身所無之）（源藤のうらい）二十太上天皇よりおぎらふる御位え給ひて云々むかしの例をあらさめて院司どもなどなり（同みとつくし）二十太上天皇よりおぎらひてこふ給いりるん〜ともなりて

るん〜ゆ（院守（源手習）三宇治の院といひし所此わたりおらんと思ひいで、院守僧都をり給へりれば

るんせん（院宣（平家物）五ノ廿五）院宣うかゞふよ一日の逗留ぞあらんぞらん

るのこ（源あふひ）四十七其よさりるのあのもちひまるらせたり補（著聞）十八るのこの餅をよめりける「なよよりも心よぞつくるのこもちひんくうにおるものと思へば

るくら（堀初）網代（師時）「ひをのよるたびよぞそらふ田上やるくらにうてるあゞろきの布○注、居坐トカク也網代守ガウヘニアガリテ火ナド焚ヤウニ拵ヘタル網代木ノウヘノ床カ

るくらす（源夢のうき橋）終をゞろにるくらさんもあや〜かるべれば〜へりおんとを

るぐひ（夫）三、源（伊正）「とびのるるぐひの柳なを〜てめくみにけりなをるを忘れぞ（同）法印（實伊）「をる雨いやふりまれり河邊なるるぐひの柳おをへをるまで補（金葉）（春經信）「をかをに花やちるらん山川のるぐひはいとゞかゝるしらおを（万代）戀一（俊頼）「山川のるくひにかゝるしらなみの行へもしらぬ戀もをるらお（同）雜三（家隆）「山川のるぐひまかよふかをよ鳥かつをるたびよ音をのおぞおく（同）雜一（俊頼）「とおせよりくたひう舟のをなれ掉るぐひおとおふ心〜てとれ

補 るやおく〜（元禮（記傳）二十七（續紀）廿ノ十二無禮久）

るや〜〜（源槇柱）卅五あおか〜おとるや〜〜〜くかきお〜給へり（同藤のうらを）廿五あるゝの御座いくゞれると宣旨ありておはさせ給ふをゞめでさくみえたれど帝い猶かぎりあるるや〜〜〜さをつく〜て見せ奉り給いぬおとをなんおゞ〜ける

ゐや丶か（土佐日記）下家の人の出入まくげならぎゐやゝりあり

ゐやーろのみてぐら（國史）卅四帝王部十四天皇不豫禮代乃幣帛並鏡

ゐやびまつり（續紀）十六爲夜備末都利 補（詔解）五ノ十七爲夜備ハ禮びまて敬と同ド

補 ゐまいる（宇治拾）一鬼どもいできたりゐまいりて酒のそあそびて

ゐまちつき 居待月（万）三ノ卅九ゐまち月あかーのとゆいゆふされい汐をそたーめ（盛衰）

廿七八月十八日のこと也宮いゐまち月をまちわびて（平家物）七卯月中の八日のこと

ゐれい云々やう〳〵日くれゐまちの月さーいでゝ（新六）ゐまち衣笠内大臣「我のそぞねら

れざりゐるかゐものくゐゐまちの月のほどいへぬをど

ゐまドる 居交る（玉葉）戀三せちまて覺えける女の人まゐまドりて侍りゐると一そぢまま

もらるゝを人やいかにおもいんとおぞえけれど

ゐで 圍碁（十訓抄）二ノ十一寐殿まて圍碁をうつ間（江談抄）三以圍碁欲試云々（つれ〳〵）

百十一段 圍碁双六このそあーくらを人い四重五逆にも增れる惡事とぞ思ふ（文德實

錄）五ノ五十 唯好圍碁 補（宇治拾）三ノ九それげうへまて圍碁盤をうらかへーて

ゐこぞりて（發心集）八ノ廿二人おぞくゐまぞりていそどうまぎやかあり

ゐこん 遺恨（平家物）一ノ三十加階まえられ給ひぬるこそ遺恨の次第なれ

ゐて 率（源桐つぼ）廿一右大弁の子のやうまおもいせてゐて奉る（空穗國ゆつり）中ノ十二

えまぬられおもーまさぬものならびもろともゐまおいーまーね（宇治拾）一五ゐて

奉りて（伊勢物）六段あくまと川といふ川をゐていきければ（同）七十五段むかー男いせのく

まゝゐていきてあらんといひはれい女云々（源帚木）四十五さて五六日ありて此子ゐ

てまゐれり（同）四十六此子をもてかーづきゐてありく（同橋ひめ）廿二京に御車ゐて

まゐるべく人もーらせ給ひつ（同夕かほ）廿六かくことなることなき人ゐておいーて

補（落くぼ）一ゐていきてふーぬ（更科日記）いづらねまいこちゐてことあるに（宇猫

治拾）九ノ廿一まゝまめーてゐてまゐりまりと人の申ければ（源横ムえ）「うきふーも

ひそれぞながらくれ竹のこいをてがたきもにぞ有けるとゐてもおちてのたまひ

かくれぞ云々（同同）あおたへゐておもせ（同玉葛）六いちーかゐ京まゐて奉りて云々

京まゐて奉るべきことをおもへ（同）七いかさままーて都まゐて奉りて

補 ゐで（新後）秋下光後「初瀨川ゐでこそ波の音よりもさやのまをめる秋のよの月（玉

葉）戀一後京極「泊瀨川ゐでこそおその岩の上まおのれくだけて人ぞこひーき

ゐでのりもづ（後）戀二忠房「かくれぬまーのびわびぬる我をかおゐでのかいづと成や

おおまー（貫之集）「音まきくゐでの山吹うつれども蛙の聲いりもらざりけり（曾

丹集）「山ぶきのまたちらぬまはもるもいぬゐるそのかゐづは身をやおさまー

ゐでのーたおび（玉葉）戀二 俊成「ときわへーゐる手の下帶行めぐりあふせうれーき玉川の水（新六）五 爲家「今さらは結ぶちぎりのもさのまれを人にとはさるゐでの下帶（夫）廿三よみ人しらす「山ーろのゐでの下帶いくよへてむすぶちぎりのあゐれーるらん

補 ゐあのは（枕）六ノ十五 廿六七日をこのりのあこのつきに物がせりーゐあらーてみれば

ゐあつまる 居集（源あふひ）四十 女房卅人ばかりこそ援ばざれつゝゐあつまりたるを

ゐざる（土佐日記）上口をーく猶日のあーけれゐるさるゐどにぞけふ廿日あまりへぬる（源末つむ）十五 おくざまへゐざり入給ふさまいとうひ〳〵ーげなり（同同）十二の六 うそゝのゐされてゐざりより給へるけもひーのびやゐは（同わか紫）十五 きゝゝーらぬやうまゐとてゐざりいづる人あなり（兼盛集）「あふことのこのさゐざりをるみどりの子のたさん月はもあゐゝどとやをる（源すま）十三 をこーゐざり出てやがて月をそておゐは（同みゆき）廿八 ゐりへざまはゐざりーぞきて 補（土佐日記）九日こゝゐもとおきはあれぬからふねを引つゝのぞれども川の水あけれゐざりはのそぞゐざる（濱松）二下 ときちやうのともにゐざりよるゐ

ゐざりのき（狹）四中五十二 やう〳〵き丁ゐまぎれいらせ給ひぬるもいと口をーー人々も今ぞおきつゝをこーゐざりのきなどーつれば

ゐさせ（枕）六二 ゐはいーやの畫にのきたるやうはうつくーげにてゐさせ給へるは（同）七二 宮の大夫殿の道長也 清涼殿の前はさゝせ給へればそれゐゐさせ給ふまゝきあめりとゐるゐどは云々 ふとゐさせ給ひーこそ 補 給ふ（伊勢集）六 つかうまつるやうはてゐ給へりける（源さかき）十八 かものいつきないそはうのゐ給ふ例おゐくもあらざりれれど（同桐つは）四 坊はもようせぞゐ此こまのゐ給ふべきまと ゐられたらぎ（同東や）十五 こゐさはも心のどりまゐられたらぎ ゐて（空穗國ゆつり）下四、兒也十四 宮ゐくびよくゐておきかへりゐどー給ふ人みてゐゐさゐはらひにてうつくー（源夕かほ）八ふこかくとてゐて侍りー人のりゐこそいとよく侍りーゐ

ゐーづまり（枕）二九 みゐゐーづまりて（源手習）四 みづー所たどゐるべかーき事どもをかゝゐるわたりはハいそぐものゐりけれバゐーづまりなどーたるは

ゐもり 蛸（字鏡）蛸爲利毛（夫）卅二「ぬぐくつのこのさゐるうへにかさゐるゐゐりのゐるーかひゐあらどゐ

ゐせき（實方集）「大井川ゐせきはつゝむ水ゐれやけふくれがたきゐ夕きそぞゐる

（頼政集）上、廿三水月「かけたるもゐるせきにあばーよどまなんいらゞをぐらの山のゝの月（新古）戀三元輔「大井川ゐせきの水のさくらもるけふいさのめーくれまやハあらぬ（同）冬經信「ちりかゝるもゝぢあがれて大井川いづれゐるせきの水のーがらみ（和名抄）一十四堰埭以土遏水也和名井世木

補（續後拾）冬寂蓮「大井川ゐせきの水や氷るらんもゝやせにをーの聲わさる也（万代）雜三俊頼「よー野川岩のゐせきにわきかへるーらゆふ花や瀧の玉水（同）戀一馬内侍「ゐせきをる岩ま水のうち隠ぬーのびかねてぞねいかかれける

補 ゐぞくむ（榮わか枝）ようがうたちゐぞくをてさつてゝちいとさびー位ヒクキ也

ゐぞまひ（枕）七ノ十二碁をやんでとなき人のうつとて云々おとりたる人のゐぞまひもかーこまりさるはーきる碁盤よりの少ー遠くも及びつゝ袖のあたいまかゝ手まて引やりつゝうちたるゐぞかー（同）三ノ廿一たかひざまづきとりやいふゐぞまひま

増補雅言集覽卷之三十終